魔法少女リリカルなのは～剣持つ者～

早乙女伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～剣持つ者～

【Ｎコード】
Ｎ９４２２Ｐ

【作者名】
早乙女伊織

【あらすじ】
別々の世界に住まう二人に出された、それぞれの任務。それは、その二人と三名のエース、四人のストライカーを繋ぎ合わせるきっかけとなる……。リベンジとなるか、早乙女伊織が贈る、もう一つのなのはシリーズ！（２０１１／３／１４修正）

零話：前奏曲（プレリュード）（２０１１／０５／０３修正）（前書き）

こんばんわ、沫乃です。

一応、予告通り、新作を投稿させていただきました。

前作である、『星空の奏者』では、設定の矛盾などが見つかり、削除するという最悪な結果になってしまいましたが、今回はそうならないよう、頑張っていきたいと思います。

零話：前奏曲（プレリュード）（２０１１／０５／０３修正）

冬木の街に、とある姉弟がいた。

二人は『封印指定執行者』、もしくは『伝承保菌者（ゴッズホルダー）』とも呼ばれ、とある『終わらない夜の戦争』を体験した人物でもある。

姉の方は現在、とある『正義の味方』を志す少年と、英雄の住まう家で療養しており、仕事のほうも休みを取っている。

そして、弟の方はというと……

「カードの回収……？」

冬木の街にあるとある教会で、自分が今回請け負う仕事についての詳細を、教会の主である神父から話を聞いていた。

「そうだ。この冬木の街から少し離れた、海鳴市という場所に散らばったサーヴァントのカード、通称『クラスカード』を回収してもらいたい」

何だよ、そのあまりにも適当な名前は、と突っ込みかけた少年。彼は大きく咳ばらいをしてそれをごまかし、とりあえず話を聞こうと軽く身を乗り出す。

「で、何だよ。そのクラスカードっつうのは」

「説明すると長いんだが……君は第５次聖杯戦争を覚えているかね？」

唐突に言い出したのは、彼が冬木の街に来る前に行われた戦争。

七名の主（マスター）と、彼等に仕える七名の従者（サーヴァント）。彼等が、一つの『どんな願いも叶う聖杯』を巡って殺し合う戦争。奇跡的に死者は出なかったものの、例外的に召喚されていた一人のサーヴァントにより、歪んだ形で聖杯が召喚された。それを止め、例外的に召喚されていたサーヴァントを倒したのが、彼の姉がお世話になっている家の主、つまり『正義の味方を志す少年』と、彼のサーヴァントである最優の英霊。というのが、彼の知り得ている第5次聖杯戦争の情報だ。

「その聖杯戦争の時、英国のとある人物が、『英霊の力を誰でも使えるようにならないか』という願望の下、作られた霊装だよ」

「つまり、それを使えば誰でも英霊の力を使える、って訳か？」

その通りだ。そう神父が答える。

誰でも英霊の力が使えるとなると、それはかなり厄介なことになる。どんな英霊でも、悪用されたらどんな被害が出るか解らない。もしも悪用されて、事件なんかが起きてしまったら一大事だ。

「つまり、事件とかが起きる前に俺が回収すれば良いんだな？」

その通りだ、と神父が言って頷く。

少年は、困り顔で頭を掻きながら、ゆっくりと席を立つ。そのまま何も言わずに、彼は教会を後にした。

少年がいなくなった後の教会。そこに取り残された形で、目の前にあるコーヒーカップを手に取る神父は、一言だけ小さく呟いた。

「頼むぞ。二人目の『伝承保菌者（ゴッズホルダー）』、ネオ＝フラガ＝マクレミッツ」

彼――――音峰綺礼の声は、冬木の街を翔ける冷たい北風に掻き消された。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

それと、ほぼ同じ時刻。

次元航行艦『オルカ』艦内。

地球に住む、歯クジラの仲間の別名を取って付けられたこの船に、ゲストとして一人の少年が乗り込んでいた。

「で、何のようだよ？」

後ろに立たせた真っ白い髪。赤い瞳に、目の付近に雷のような赤い入れ墨のような痕。管理局の制服を崩して着こなす彼の瞳には、既に面倒臭いという感情しか込められていない。

今の彼の態度に、少年の周りにいるスタッフ達が憤りを覚えるが、少年の目の前にいる艦長が、右手を上げてそれを鎮めさせる。

「話というのは、ほかでもない。キミには、異世界での回収任務に当たってもらいたい」

「異世界だぁ？」

『異世界』という言葉に、少年が異常に反応した。視線も鋭くなり、話を聞こうとする意欲が少し向上したかのように見えたのだ。

するとオールバックの白い髪の艦長――――パルミナ＝バルムンク提督は、してやったりと言わんばかりの顔をして、彼に語りかける。

「実は、異世界にかなり強い魔力反応がいくつかあったんだよ。向こうにいるエース達も、まだ反応に気がついていないようだし。合流して、共に回収してくれないか？」

パルミナの少し強めの請願に、少年は少々たじろいだ。

断ろうか？そう少し考えた少年だったが、少しここで思い止まった。

ここでこの任務を受けておけば、自分の昇進機会も増えるし、経験も増える。それに、エースと仕事が出来れば、自分にも良い経験がつめる。そう考えれば、いいタイミングかもしれない。

「解りました。今回の任務、このハセオ＝ミサキ二等陸士が受けさせていただきます」

「そうか、頼むよ」

そう少年――ハセオ＝ミサキはそう言うと、席を立ってその部屋を出ていった。

少年が出ていった後の部屋で、パルミナはリンディから教えてもらった特製のお茶を前にして、つぶやいた。

「頑張れよ、黒の練装士よ」

そう呟いて、パルミナは目の前のお茶を飲んで一言「まっず……」と呟いたのは、また別の話。

零話：前奏曲（プレリュード）（２０１１／０５／０３修正）（後書き）

とりあえず、プロローグはこんな感じです。

次回から、リリなのキャラが合流します。一応、時系列はＡ，ｓとＳｔｒｉｋｅｒＳの間の空白期です。

それでは、次回をお楽しみに！

一話：冬木から来た執行者とミッドから来た練装士（前書き）

少し早めに投稿できました。意外とすらすら書けて、よかったよかった（？）

今回は、最後の後書きコーナーにお知らせがあります。それにも、ご協力お願いします。

では、どうぞ！

一話：冬木から来た執行者とミッドから来た練装士

ＳＩＤＥ　ネオ

-体は剣で出来ている（Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ）-

そんな声が、寝ていた俺の頭の中に響いたせいで、俺は目を覚ました。

そう、この声は、聞き慣れた彼の声。俺が近接戦闘、弓術、家事全般の師匠とした、彼が発した声だった。

だけど、彼はこの場には居ない。寧ろ、彼は今頃、自身の家で『あかいあくま』『食いしん王』それと『俺の姉』の世話をして、東奔西走のことだろう。

（悪いな、士郎。まぁ、頑張ってくれ）

家主に詫びの言葉を心の中で唱えつつ、再びバスの背もたれに体を預ける。そして、再び『教会』から先日送られてきた任務について、思考を巡らした。『冬木の町以外に散らばった、クラスカード７枚全ての回収』。それが俺、魔術教会所属の封印指定執行者、ネオ＝フラガ＝マクレミッツの仕事だ。先日急に入った任務だったため、衛宮邸で療養中の俺の姉、バゼット＝フラガ＝マクレミッツは出撃できず、代わりに俺が入るというわけになったのだ。

「ったく、あの野郎。この任務終わってかえったら、殴り倒してやる……」

俺に、この任務を半ば無理矢理に請け負わせた、あのいけ好かない神父に悪態を付きながら、俺はバスの外の景色に視線を移す。

すると、窓の外に五人の少女の姿が映った。栗色の髪のサイドテールで、どことなく危なっかしい感じを思わせる少女。金髪のロングヘアー、赤い瞳という、外国人っぽい風貌の少女。茶色のショートヘアーに白いヘアピンを付けた少女。紫のロングヘアーで、おとなしそうな少女。金髪のロングヘアーに、活発そうなイメージを持つ少女。皆それぞれに個性を持っているが、何よりいえることが一つ。

それは、皆がとても美人だ、ということだ。そんじょそこらの女性とは、一角を違えるほどの美しさだ。これは、桜や凛にも負けず劣らずだな。

そんなことを思いながら外を見ていると、ちょうど金髪赤眼の少女と目が一瞬合った。

そのまま視線を先にずらすと、なにか異様な感覚を覚えた。

これは、魔力の反応？しかもそれが、あの少女のうち、前を歩く三人が放っていたのだから、余計驚いた。

（彼女達は、魔術師なのか？）

そんな思いを胸に抱いて、向かう先を確認した。確か『海鳴臨海公園前』。そこの近くにある、マンションの一室を買ったらしい。流石は陰険神父。どんな脅しを使ったんだか。

すると、バスのアナウンスが『海鳴臨海公園前』を告げた。どうや

ら、到着したようだ。

俺は足元に置いておいたボストンバッグをとって、肩にかける。そのままカードで払い、バスから降りる。

目の前には自然あふれる臨海公園。綺麗な公園だった。その近くには、俺が住むであろう大型マンションがあった。

「うん、立地条件よし。当たりだな」

そんなことを呟きながら、俺はマンションに入り、管理人（若めの爺さん）に今日からここに住む人だ、と告げる。するとリストを出して俺の名前を確認すると、部屋の鍵を渡してくれた。

管理人の爺さんに礼を言うと、とりあえずエレベーターを使ってその階まで上がる。

「５０４……ここか」

俺は部屋鍵と部屋番号を確認すると、取り合えず部屋に入る。

間取りは３ＬＤＫ。うん、なかなか良いところを取ってくれたな陰険神父。

取り合えず荷物の片付けに入ろうか。そう思い、俺はバックの中を漁りはじめた。

ＳＩＤＥ　ネオ　ＥＮＤ

ＳＩＤＥ　フェイト

今の子は誰だったんだろう？

ワックスでも付けているのか、茶色の短髪を軽く立たせて左目は前髪で隠している。かたっぽだけ見えた青い瞳は、確実に私の方を見つめていた。

その瞳から感じた、どこか寂しそうな感情。それは、いつかなのはが言っていた、昔の私の瞳と似ていた。

それに、彼が視線をずらした瞬間、うっすらと感じた魔力の感覚。

それは、今私の隣を歩く親友の二人と同じ柔らかな魔力の感覚とは違って、寧ろそれは……

（なんか、針？　いや、剣みたいだった）

ずっと周りを警戒しているみたいな、「俺は危ないぞ」って言う、スズメバチみたいな感じになっていた。あれ、なんか、表現変かな？

「フェイトちゃーん、はーやくー」

少し物思いに耽っていると、いつの間にか前を歩いていたなのはが私を呼んだ。

「ごめん。すぐ行くよ」

そう一言言ってから、私はなのは達に追いつく。追いつくとすぐに、なのはの隣に居るはやてが声をかけてきた。

「どうしたん、フェイトちゃん？」

「ううん、何でもないよ」

はやての質問に短く答え、「フェイトが考え事なんて、珍しいわね」と言うアリサの隣について歩く。

すると、私のケータイがスカートのポケットで震えた。多分メールか電話、しかもこの震え方は、家からの有事関係の連絡だ。

私は歩きつつもケータイを取り出し、開く。そこには、メール受信完了の文字が踊っていた。

（メール？　となると、クロノ辺りかな？）

簡単に予測してから、私はメールを開き、中を読む。

差出人は、予測通りクロノ。タイトルは『集まってくれ』？　何なんだろう？

内容は、『本局から、三人宛の任務が入った。内容を教えたいので、ハラオウン家に集合してくれ』、との事だった。

私はこの事を二人に教えるため、念話を飛ばす。

（なのは、はやて。クロノから連絡。緊急の任務があるから、うち

に来てくれって）

（ん、了解や）

（分かったよ）

二人からの返答を受けたところで、私の家に続く十字路に出て、皆と別れる。少ししてから、後ろから二人がついて来る。家の人には、もう連絡をしたみたいだった。

少し小走りになりながら私の家に向かっていると、唐突にはやてが口を開いた。

「さっきのバス、中からミョーな魔力反応が有ったんけど、分かった？」

「えっ？」と言う疑問混じりの声が、魔力反応が分かっていた私だけでなく、隣を歩くなのはからも上がっていた。どうやら、それに気付いていたらしい。

「なんなんやろね？」

「きっと、その事も含めて教えてくれるよ」

「そうだね、きっと」

そんなことを話しながら、私達は自分の家兼地球での活動拠点となっているマンションに着いた。

持っているスペアキーで扉を開けて、エレベーターで自分の家があ

る五階まで一気に上がる。

五階に到着と同時に軽く飛び出して、部屋に駆け込む。

「ただい……ま？」

リビングに行くと、何故かソファに、白髪赤眼の見慣れない管理局員の男の子が座っていた。

ＳＩＤＥ　フェイト　ＥＮＤ

ＳＩＤＥ　ハセオ

次元空間転送ポートを幾つか乗り継いで、やっと到着した今回の任務先。確か、地球とかいってたよな。

意外とミッドと大差変わりはない。空気も淀んでないし、空は青い。太陽は一つだけだし。いたって普通の世界みたいだ。

ただ一つ。魔法文化がないってこと以外はミッドと同じだな。

「っつうか、迎えの奴どこだよ」

そんなことを呟きながら、俺は辺りを見回した。確か、海鳴駅に１４３０時に集合、後、迎えの奴が来るっていうのが、俺が一昨日話したパルミナ＝バルムンクって奴の話だった。

「あの艦長、時間間違えたんじゃ「いやぁ、すまない。待たせたね」あァん？」

俺に向かって唐突にかけられた、不意な声。それに反応して後ろを向くと、そこには緑髪ロン毛の好青年（？）が立っていた。右手を軽く上げて、遅れたことを軽く詫びている。

「いやぁ、済まない。少し道に迷ってしまってね」

そう軽く謝るそいつに、俺はジト目で睨みながら言った。

「アンタ、誰？」

「あぁ、紹介がまだだったね。僕はヴェロッサ＝アコース。査察官で、キミの迎えのものだよ。ハセオ＝ミサキ君？」

俺は、名前を呼ばれて一瞬身構えたが、迎えの人なら俺の名前を知っていて当然だし、査察官と言う身分の関係上、そうそう嘘は付けないだろう。そういう理由で、構えを解いた。

「じゃ、こっちに車を用意してあるから、来てくれるかな？」

「……あぁ」

俺は、ぶっきらぼうにそう答え、アコース査察官の後ろをついて行った。

ＳＩＤＥ　ハセオ　ＥＮＤ

ヴェロッサの運転する車に乗り込んだハセオは、後部座席で始めからだんまりを決め込んでいた。

沈黙が続く車内。しかし、その沈黙をヴェロッサが不意に破った。

「聞いていいかな、ハセオ君？」

「あ？　何をだよ？」

出会った時から、全く変わらないぶっきらぼうさで返答するハセオ。彼は、ムスッとした表情のままヴェロッサを見た。バックミラーから見える彼の表情は、会った時の軽い感じよりも、真剣みが異常に増している、そんな感じだった。

「キミは、何故“三爪痕（トライエッジ）”を追っているんだい？」

「っ！？」

『三爪痕（トライエッジ）』。その言葉が出ただけで、ハセオの顔に動揺が走った。そして、運転するヴェロッサの背もたれに食いつくようにくっつき、彼に問いた。

「アンタ、三爪痕（トライエッジ）を知っているのか！？」

「まぁ、多少の事なら、ね」

「教えてくれっ！　奴は、奴は今、何処に居る！？」

食いつくようにヴェロッサに話し掛けるハセオ。そんな彼の、あまりにも取り乱す様子をみて、ヴェロッサは笑いながら軽くあしらう。

「まあまあ、落ち着いて。本当は、今説明したいところなんだけど……」

ほら、とヴェロッサは前を指差した。

すると、右斜め前に大きなマンションが見えてきた。ヴェロッサは、ここが彼の活動拠点になる場所だ、と告げ、そのマンションの前で下ろした。

彼は後ろに積んでいて、今は道の真ん中に無造作に置かれているスーツケースを手に取り、マンションの中に入る。

マンションのエントランスに入るやいなや、突然後ろから肩を叩かれた。ハセオは咄嗟に反応して、後ろを振り向くと同時に肩に乗せられた手を振り払う。

彼は、その手を振り払ってから驚いた。何せ、彼が振り払った手は、あのリンディ＝ハラオウン統括官だったのだから。

彼はリンディに向き直り、珍しくビシッと敬礼しながら話しはじめる。

「も、申し訳ありません！　私は、今回の任務のため派遣された、ハセオ＝ミサキ二等陸士であります！　先程の御無礼、お許しください」

そうハセオが言うと、リンディは柔らかい笑顔を見せながら彼に言った。

「まぁ、突然肩を叩けば、そうなるわね。ごめんなさいね。それより、貴方が今回の任務の派遣要員なのよね？」

「はい。　今回の『正体不明ロストロギアの回収任務』の派遣要員です」

彼はそう告げると、スーツケースの外側にあるポケットから、今回の自分の任務についての資料を取り出し、彼女に渡す。それを彼女は受け取り、軽く読み流すと四つ折にしてポケットに入れる。

「じゃ、ついて来て。一応、家が作戦本部になっているから」

「はい」

そう言われ、二人はエレベーターに乗り、五階まで無言のまま上がる。ハセオはその時、幾つか聞きたいことがあったが、本部に着いてからでも聞けることなので、ここはスルーした。

五階に到着してから、彼らは少しだけ歩いた。その途中、確かにハセオの視界に、５０４号室に『新人さん』と言うパレットが入っていたが、気にしないことにした。

「ハイ、着いたわよ」

不意にリンディから掛けられた声に気づいて、ハセオは足を止める。

そこは５０９室。表札プレートには『ハラオウン』としっかり刻まれていた。

リンディはポケットから部屋の鍵を取り出し、鍵を開けて中にはいる。それにハセオも続いていく。

中は、なかなかに洒落ている。それがハセオが持った第一印象だった。しかし、部屋の所々にミッド製の機材やら何やらが置いてあるのに、思わず苦笑してしまう彼だった。

「少しゆっくりして良いわよ～。一応、娘とその友達にも手伝ってもらう手筈になっててね、今日家にくるのよ。それまでのんびりしててね」

リンディがキッチンの所で、彼に背を向けたままそう言うのを、ハセオは軽く聞き流しながらバッグの中から自分のデバイスを取りだしていた。

そのときだった。不意に聞こえたガチャリと言う玄関のドアが開く音。そのあと直ぐに聞こえる幾つかの足音。

「ただい……ま？」

リビングと廊下を繋ぐドアから出てきたのは、彼が唯一尊敬している魔導師の一人である、『黄金の雷光』の二つ名を持つ、フェイト＝Ｔ＝ハラオウンだった。

これが、ハセオとフェイトの、初めての顔合わせだった。

剣☆持質問＆amp;雑談バコ！

ネオ
「初めまして。今回、司会を務めさせていただくネオ＝フラガ＝マクレミッツです」

士郎
「アシスタントの、衛宮士郎だ」

ネオ
「では、このコーナーの説明から。このコーナーは、読者の皆様から寄せられた今作に関する質問に、視界とアシスタント、そのつど現れるであろうゲストの皆様と一緒に答えていくというコーナーです」

士郎
「で、今回はゲストがいないから俺とネオだけって事か」

ネオ
「そう言うことになりますね。では、最初の質問！」

士郎
「えーっと、お、これは……バルディッシュ先生からの質問だ」

ネオ
「ぁ、それ感想ページにあったやつだね」

士郎
「あぁ。『ネオと士郎の関係は？』と『何故言峰が生存しているのか』の二つだぞ」

ネオ
「確かこれ、微妙にネタバレになってるよな？」

士郎
「ここで答えて良いものなのかなぁ？」

ネオ
「まぁ、一応そう言うコーナーなので、答えてしまいましょう。えーっと、俺と士郎さんは、一応師弟関係となっています。家事全般、剣術、弓術の師匠です」

士郎
「家事全般とは言っても、俺は料理メインだけどな。ほかは桜がメインだったな」

ネオ
「では、次の何故言峰が生存しているのか、ですが、言峰はしっかり死んでいます。先月、墓参りに行ってきましたよ」

士郎
「あの教会に神父は確か……音峰とか言ってなかったか？」

ネオ
「ハイ、そんな感じの名前ですね。とにかく、あの神父は言峰じゃありませんよ？」

士郎
「……お、ネオ。もう時間だぞ？」

ネオ
「お、マジだ。では。ここからは告知です。よく読んでくださいね」

士郎
「実は、５話辺りでネオとハセオの初戦闘があるんだけど、ハセオのデバイスの名前がまだ決まってないんだ」

ネオ
「そこで、読者の皆さんに名前を決めてほしいんです。デバイスは可変型の近接三種（双剣、大剣、大鎌）で、形などは：ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕのハセヲの武器をそのまま使う予定でいます」

士郎
「皆さん、ふるってご応募ください！」

ネオ
「では、この辺りで今回は終了しますね。次回『二話：邂逅　ネオ編』！」

ネオ・士郎
「黄昏を乗り越え、光を目指せ！」

一話：冬木から来た執行者とミッドから来た練装士（後書き）

ハセオのデバイスの名前募集、よろしくお願いします。

タイプは手袋型で、手のひらから近接三種（双剣、大剣、大鎌）を取り出す形になります。それぞれの武器の形は．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．を参照ください。

では、感想、質問、意見、音書きコーナーへの出演など、お待ちしております！

次回もお楽しみに！

二話：邂逅。執行人と無限の残骸（前書き）

今回の雑談箱は、お休みです。

あと、こちらに寄せられた質問などは、『リリカル☆剣虹ラジオ』の方で答えていきたいと思います。

今回は、ネオがメインの話です。

それでは、本編をどうぞ。

二話：邂逅。執行人と無限の残骸

片付けが終わったネオは、あらかた整った部屋で一服していた。

昨日の内に届いていたローテーブルを前に、彼は先程買っていた餡団子のパックを置き、麦茶をコップに注ぐ。

「ふぅ。切り札殺しはいまんところこれだけか。まぁ、間に合うかな？」

フッと後ろを向いて、後ろにある三つしか無い自らの切り札である宝具を見る。

それは、青く光る球体型の柄の、『刃の無い』短剣。彼と彼の姉が受け継いだ『切り札（エース）を潰す切り札（ジョーカー）』。迎撃礼装としては、この世に存在するどの宝具よりも無類の強さを誇る『斬り刈る（フラガラック）戦神の剣』である。

一ヶ月に一つしか生成できないこの剣は、彼にとってのお守りでもある。

何故一ヶ月に一つだけなのか、と言うのはまた後程語ることにしておいて。

彼は今、テーブルに置かれた餡団子を頬張りながら、数十ページはあろうかというほどの厚さの紙の束――今回の任務のための資料を読んでいた。

今回の任務で回収すべきカードは七つ。『剣士の英霊セイバー』、

『槍兵の英霊ランサー』、『弓兵の英霊アーチャー』、『騎乗兵の英霊ライダー』、『魔術師の英霊キャスター』、『暗殺者の英霊アサシン』。そして、『狂戦士の英霊バーサーカー』の七つのカードである。

彼はその中でも、三枚のカードに着目していた。『セイバー』『ランサー』『バーサーカー』の三つだ。

何故その三枚なのか？それは、回収するカードの中でも、それらの危険性が高いからだ。

サーヴァントカードと言うのは、回収するために封印処理を行おうとすると、防衛の為にそれぞれに見合った英霊の幻影を生み出し、回収者を退ける能力がある、というのを神父から聞いていた。中でもセイバー、ランサー、バーサーカーの英霊は、彼の知る第五次では異様な強さを発揮していることを知っている。

剣士の英霊セイバー。別名『最優のサーヴァント』とも呼ばれ、その単純な戦闘力は勿論、魔術耐性にも強く、持つ宝具もかなりの力を持つ。

槍兵の英霊ランサー。槍兵の名の通り、槍を使った高速戦闘を好み、出てくるものによってはネオが苦手とする英霊の一つである。

狂戦士の英霊バーサーカー。これは例外だな、とネオは軽く放っておいた。あまりにも強すぎるため、なるべく相手にしたくないなとネオは語る。

そんな事をしていると、ネオの腹が鳴った。時間を見ると、既に１２時をゆうに越えていた。

「飯、食いに行くか」

そんなことを呟くと、彼はキャッシュカードと現金、その他諸々のポイントカードが入った財布をポケットに入れて、マンションを出た。

マンションを出たネオは、マンションの周辺を見渡して食事処が無いか探した。しかし、それが無いとわかるやいなや、そのまま真っすぐ歩き出す。

駅の方まで行けば、ファミレスくらいはあるだろうが、彼はそんな場所には行かない。

彼は少し距離があっても、小さな自営業の店に行く珍しいタイプの人間なのだ。

冬木の街にいた時は、朝昼晩毎日士郎の食事をとっていたため、ファミレスの味に慣れなくなってしまったのだ。そのかわり、自営業のそれぞれ個性のある料理に手を出すことが多くなっていた。

故に今、彼は人通りの多いであろう商店街を目指していた。目的は、そういう店の情報収集と、ついでに今日の夕食の食材集めのためだ。

（今日は……麻婆豆腐だな）

ふと思い付いた料理は、冬木の街にいた時に、とある神父に振る舞ってもらった麻婆豆腐。異様に辛く、しかし美味しい、というあれは、一時期病み付きになった記憶があった。

（と言うと、必要なのは豆腐と挽き肉と……）

わずかに俯き加減で歩いていると、誰かの肩が当たった。さほど強くない衝撃だったため、彼は「失礼」と短く言ってその場をあとにしようとする。

しかし、彼だって見てなかった訳ではない。彼は生粋の戦闘馬鹿だ。故に、気配察知等の能力は折り紙付きだ。先ほどだって、人数、移動速度等の計測は完璧だった。だから、彼だって軽く肩を右に逸らして避けたつもりだった。しかし、相手側はわざとぶつかってきたようだったので、そこは無視した。

しかし、肩が当たった方はそうはいかないようだった。だいぶキレた様子で、スタスタとその場を去ろうとするネオをにらむと、素早く彼の後ろまで迫ると、彼の肩をむんずと掴んだ。

「ちょっと待てや、小僧」

肩をぶつけてきた不良（ここではAと呼称しよう）は、掴んだネオの肩を更に強く握り威嚇するような行動を示す。彼の後ろには、更に数人の柄の悪い少年が控えている。

そんな烏合の衆とも呼べる集団を、ネオは軽く一瞥する。周辺には多くの人が行き交い、その殆どが今起きている状況を分かっているのか、チラッと見てはすぐに立ち去る。助けは呼べないと分かっている。しかし……

（もとより、助けなんかいらないか）

そんなことを、一人心の中でつぶやくと、彼は肩を掴んでいる不良Aに向かって、言った。

「手、離してくれません？　僕、急いでるんすよね？」

「はぁ？　ぶつかっておいてその態度かよ。ふざけてんじゃねぇぞ！？」

肩を掴んでいる奴じゃなくて、その後ろに控えているトサカ頭の不良（Bと呼称しよう）が吠えた。それを切目に、一斉に不良共がほえ立てた。

それぞれが何を言っているのかは、ネオには分からなかった。だが、不良達がネオに対して、文句を付けていたのはしっかり理解できた。

それを何とか聞き取ると、ネオは肩に乗せられた手を払いのけ、不良Aをしっかと見る。

「で、どうすりゃ良いんだ？」

短く聞くと、不良Aは払いのけられた右手の人差し指と親指で円を作り、ネオに見せ付けた。

「あるだけ全部、置いて行け。間、土下座して謝るなら、話は別だけどな」

そう言って、少しばかりの沈黙が出る。しかし、ネオが自分の尻ポ

ケットから少し分厚い財布を、自分と不良の間に投げ捨てたことで、不良達の笑い声が一気に響いた。そして、不良Ａの後ろにいた奴が、その財布を取りに行き……

「へへッ、いただ……あぼぉっ！」

勢いよく回転して、そいつは地面にたたき付けられ、一メートル程跳ねた。地面に背中から落下した時、顔は違う方向を向いており、既にその目は死んだ魚の様だった。しかし、腹部が上下していることから、まだ呼吸はしていて死んでいない。そう不良ＡとＢは判断し、今の事をやった張本人を睨んだ。

そのやった張本人は、右手を革の手袋で覆い、下に向かって右拳を振り下ろしたような体勢で、その場にピタッと固まっていた。

ネオが放った『メテオナックル』だ。上から下に全体重をかけた鉄拳を打ち下ろし、顔面辺りを捉えて相手を地面に叩き付ける、ネオの必殺技。それを、財布を取りに来た不良に目掛けて、ほぼ全力で放ったのだ。

「ふっ、やっぱりおつむの出来が悪いな」

メテオナックルを放った体勢から、一度自然体の体勢に戻り、右手を払う。そして、目の前で固まっている不良達の目の前で自分の財布を回収すると、尻ポケットに入れ直してから、『戦闘体勢（ファイティングポーズ）』を取った。

それを見た不良達は、ネオがやる気と悟ったのか、まるで一匹の獲物に一斉に飛び掛かる狼の如く飛び出した。

しかし、彼等はすぐに後悔することになる。それは、目の前にいる少年が、自分達とはあまりにも掛け離れた強さを持っていたからだ。

「うおぁぁぁぁぁごがぁっ！」

いち早く飛び出した彼等の仲間が、何もする間もなく呻き声を上げ、体をくの字に折ってその場に倒れ伏せた。

何が起こったか分からない不良達は、とりあえず前を見る。

するとそこには、低い体勢で腹部に肘鉄をかました体勢で制止しているネオが、何も言わずにいた。

「や、やろう！？　やっちまえ！」

しかし、そんなことで怯む奴らじゃない。今度は二人一組の形で一斉に襲い掛かった。

しかし、そんなものをネオは何一つ見ていなかった。

彼は、再び低い体勢で戦闘体勢をとると、右ストレートを雑に打ってきた二人に向けて、超速の左ジャブを二連続で繰り出し、一撃で意識を刈り取った。

まさに一瞬の出来事。一分もかからない内に三人の仲間がやられた不良達は、彼の異常さにおののき、数歩後ずさる。それを追うように、ネオは数歩進む。

「分かったでしょう？　あまり調子に乗ってると……」

瞬間、ネオの周りから赤いオーラが放出される。それを見て、『殺気』と判断した不良達は、しっぽを巻いてちりぢりになって逃げていった。

「……全く、無駄な時間を使っちまった」

そう愚痴るネオは、体中に付いた埃を払うと、周囲にいた人に「すみません」と謝罪した後、すぐにその場を立ち去った。

しかし、そのあとすぐに来た警察に捕まり、事情聴取を受けたのは、言うまでもない。

その後、近くの商店街。

「はい、毎度あり〜」

事情聴取を何とか乗り越えたネオは、その流れで商店街で買い物をしていた。目的はもちろん、今日の夕食の食材集めである。

とりあえず、八百屋で大量の野菜を買い込んだ彼は、ハッと何かに気がついたような表情になってから、お金を払った八百屋のおばちゃんに声をかけた。

「おばちゃん、ちょっと聞いていい？」

「ん？　なんだい？」

「この辺りにさ、おいしい自営業のお店ない？」

ネオの質問に、首を傾げて考える八百屋のおばちゃん。しかし、数秒その体勢をとった後、ハッと閃いたような表情をして、ネオに言った。

「商店街を出て直ぐに、喫茶翠屋っていうお店があるよ。翠屋の翠は翡翠の翠ね」

「翠屋、か。ありがとう、おばちゃん」

八百屋のおばちゃんにお礼を言ったネオは、野菜を詰めた袋を持ち直し、目的地となる翠屋へと向かった。

商店街を出て直ぐに、その店はあった。

外見は、中々シックな作りだった。だいぶ繁盛しているようで、外から見ても中が賑わっているのが感じられるほどである。外付けのテーブルもほとんど埋まっている事から、地元ではかなりの人気を誇っているのだろう。

そんな推理をしてから、彼は袋を持ち直して中に入ろうとした……

……

「――――っ！？」

が、それは完璧に憚られた。

「この感覚……まさかっ！」

不意に感じた、体の芯を刈られるような、嫌な感覚。それは、『あの時』感じた感覚と同義だった。

「クソッたれが。何でここに、アレがあるんだよっ！？」

悪態をつきながら、彼は来た道を逆走する。

向かう先は、海鳴臨海公園。そこの、森林部だ。

彼は、荷物を持ちながら走っているとは思えない速度で商店街を駆け抜ける。何かに取り憑かれたかのように、ただひたすらに。

臨海公園についたネオは、買った野菜などを木陰に隠し、再び走り出す。

その間にも、以前左肩に付けられた古傷が幾度も疼いた。その度に肩を押さえ、痛みを堪えながらも、彼は走る。まさにその速度は、韋駄天か何かのようだった。

そして、彼の感覚で、『アレ』の反応が一番強く、そして濃い場所にたどり着くと、その場に停止。力を溜めるようにして、低く腰を

落とす。すると、彼の両手両脚が青く光り輝き始めた。

「さぁ、来るなら来いよ！」

まるで怒号とも言えるような咆哮。その声が、彼のいる森の中に響き渡り、その声が空間を支配するが如く浸透する。

すると、その声をのこ待っていたかのように彼の目の前に黒い影が一気に現れ、彼の周りを取り囲んだ。

その影は、過去に自分の姉が原因で生み出してしまった負の産物。一度はかの有名な黄金の英雄王によって消し去られたはずだった『無限の残骸（アンリミテッドイズ・デッド）』だった。

しかしネオは、それを見て臆するどころか逆に不敵な笑みを浮かべ、更に構えを強くする。

「へっ。何で出て来やがったか知らないが、おもしれぇ。あん時みたいに、ひとっ欠片残さず消し去ってやるよ！」

その声を合図に、影はネオを切り裂かんと食いかかる。それに合わせて、彼も地面に拳をたたき付けて結界を展開、体勢を立て直してから一気に突撃した。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

それの数刻前。

海鳴の商店街。そこの裏道を、四人はただひたすらに駆け抜けていた。

「ほんまなんやな、クロノ君？」

『あぁ、本当だ。もう一度言うが、海鳴臨海公園の森林部に、未確認の巨大な魔力反応があった』

走りながら、はやては携帯端末でクロノと通信する。その後ろからは、先ほどハラオウン邸で合流したフェイト、なのは、そしてハセオがついて来ている。

「はやてちゃん、その反応って、まさか……」

「なのはちゃんの勘が正しければさっきの、かもな」

そんな会話を交わしていると、後ろにいたハセオが一気に距離を詰め、はやての隣に並んだ。

「なぁ、はや……八神一尉、その魔力反応って、なんなんすか？」

「あ、ハセオ君には話してなかったね。さっき、ハセオ君とは別の魔力反応があったんよ」

「それも、かなり大きいやつ。きっと、今回のに関係してると思うんだ」

既にはやての少し前にいたフェイトが、彼にたいして補足説明をする。

そして、彼女達が臨海公園に到着した、その瞬間……

「「「「！！」」」」

公園の森林部、その中央部から、蛍光ブルーの光が立ち上った。

二話：邂逅。執行人と無限の残骸（後書き）

次回予告

始まった執行者と残骸の戦い。

それを見る、管理局のメンバー四人。

終わることの無いような、永遠に近い戦い。

しかし、それは彼の力によって……

次回

『天の柱』

黄昏を乗り越え、光を目指せ！

三話：天の柱と戦いの始まり（２０１１／０７／２７）（前書き）

今回と次回は、久々のマジバトルかもしれないです。

では、どうぞ！

三話：天の柱と戦いの始まり（２０１１／０７／２７）

森林の開けた場所に、黒い塊が突き刺さった。突き刺さった場所は真っ黒に腐食しており、それは存在した生物はすべて生き絶えさせる、地獄の一撃だということを感じさせる。

そんな攻撃を辛うじて紙一重で回避した彼は、青く光る右腕を少しだけ後ろに引いて、

「――――っだぁぁっ！」

咆哮とともに右腕を突き出し、そこから蛍光ブルーの閃光を、黒い塊に叩き込む。

『レイ・ブレイザー』。それが、彼の魔術の名前だった。両手足の魔術回路からの魔力を攻性魔力へと変換させ、一点に集中させて放つ射撃魔術だ。彼が、一時期放浪の旅に出掛けていた時に出逢った『ミス・ブルー』直伝の魔法を、彼用に作り替えた半コピー魔術である。そんな大技を喰らった黒い塊――――無限の残骸（アンリミテッド・デッド）だが、一瞬だけ霧散し、再び集合して獣の形を作った。そんな無駄にしぶと過ぎる残骸の群を見て、彼――――ネオは、軽く舌打ちをして、再び襲い掛かった黒い塊の一撃を回避した。

「くそっ。さすがに昼飯がカロリーメイトだけじゃ、体力が持たないか？」

そんなことを呟きながら、彼は迫りくる残骸達を硬化ルーンを刻んだグローブで殴り飛ばし、迎撃していく。しかし、そんなことをしていられるのもつかの間。彼は、自分の周りが黒く陰っていたのに、

ようやく気がついた。

「な――――っ！」

既に包囲されていた。残骸は、その矛先を彼に向け、狙いを定めるかのようにユラユラと揺らいでいた。

絶体絶命。しかし、彼には一つの秘策があった。それなら、この危機を脱することが可能だ。しかし、それには彼の切り札の一つを使うことになり……

（こんな、市街地に近い場所じゃ、使えない……でも、今は）

そんなことを言ってられる場合じゃない。彼は、覚悟を決めた。

「――――――ふぅっ」

短く息を吐いて、もう一度吸い、止める。そこからゆっくりと腰を落とし、姿勢を低くしてから右腕を大きく振りかぶった体勢で構え、その場に待機する。

チャンスはたったの一度だけ。相手が攻撃してきた、その零コンマ一秒後に合わせなくてはならない。

残骸がさらに背を伸ばし、その牙を大きく広げ、再度狙いを定める。それに合わせるように、右腕を大きく引いた。

――――魔術回路、装填。

一つずつゆっくりと、残骸達に悟られないように撃鉄を落としてい

く。その数は十。彼の魔術回路の数は三十。三分の一の量をつぎ込むには訳があり、それだけつぎ込まなければ使えない魔術を使う証拠。

しかし、もともと装填する回路の数なんてあまり関係ない。そこにどれだけの魔力を込めるかで、話は変わってくる。一の回路を以って流し込んだ彼の十の魔力は、百の回路を以っ千の万の魔力を引き入れ、彼の周りに纏われる。

「――――――――っ！！」

その行動を攻撃反応と判断した残骸達は、ネオにむけていっせいに食いかかる。しかし、彼は全く動じず右腕をさらに高く上げ……

「――――せぃやっ！」

地面にたたき付ける！

右腕に集められた魔力は、地にぶつかった瞬間に逃げ場を失い、地上に波となってうねり、残骸を吹き飛ばしていく。

そして、彼の胸の辺りがX字に光り始めた瞬間……

「天葬（てんそう）ぉぉぉぉっ！」

一つの言葉を紡ぎ、空から彼にむけて光の柱が幾重にも降り注いだ。

彼の戦いを見ていたなのは達四人は、あまりの光景に言葉が出なかった。

黒い影と、それと戦っているスーツの少年。自分達と同じくらいの年齢だろうか？無造作に伸びた前髪に隠れていない右目に、僅かに幼さが残っているが、それ以外は異様に大人びて見えた。

それに彼は、『魔法陣の展開無し』に魔法を使用した。少なくとも、彼女達が今までに見た魔導師の中には、そんな人はいなかったし、尚且つあの威力の魔法は見たことがなかった。

（あんな計算違いな人、見たことある？）

（ううん、ないよ。というか、会ってたら真っ先に局入りを勧めてるって）

（お、同じくです。八神一尉）

はやてがなのはとハセオに念話をしている中、同じ内容が飛ばされていたフェイトからの返答が返ってきていなかった。

（？　フェイトちゃん、どないしたん？）

（……う、ううん。なんでもないよ、はやて）

はやての質問に少しだけ間を開けて答えたフェイト。そんな彼女は、今前に居る彼をしっかり凝視していた。

（あの子、やっぱりさっきの……）

彼女はしっかり覚えていた。今、そこに居る彼は、あの時感じた魔力の感覚。バスの中に居た少年だということを。前髪で片目が隠れているのが、その何物でもない証拠である。

そして、目の前の光の柱が消えた時、その場に膝を着き、息を荒くしている少年がいた。フェイトは思わず駆け出そうとしたが、ここはひとまず様子を見るべきと自制をかけ、その場に踏み止まった。

すると、少したってからようやく息が整ったのか、少年は立ち上がって体中に付いた土埃を払い落とす。そして、足元に落ちていた何かを拾い上げた。

（……っ！　あれはっ！？）

ハセオはそう念話でつぶやくと、茂みから勢いよく踊り出て、少年の前まで走っていった。それを見て、なのは達も走り出した。

天葬を使用し、残骸を消滅させたネオは、その場に膝を付いた。

「はぁ、はぁ、はぁ――――っあ」

体中が軋み、悲鳴をあげているのが分かる。魔力にまだ余裕はあるが、体力的にかなり危険な状態になっている。まるで、三日三晩続けて、姉のサーヴァントと模擬試合をやったかのような疲れ方だ。

「こんなところ、また襲われたら、怪我だけじゃすまないだろうなぁ」

そんな悠長なことを言いながら、彼は座ったまま深呼吸をして、息を整える。

すると、彼の視線の先に、一枚の古ぼけたカードが落ちてあった。どうやら、先の残骸の中にあったのだろう。まだ残骸の切れ端がひっついているのが、その証拠である。

未だ疲れのたまっている体を引きずるようにして移動した彼は、そのカードを拾い上げて立ち上がる。

表の絵柄は分からない。裏は、中世に作られた様な感じを醸し出していた。

そして、それを手に取った彼は、次にどうすればいいのか分かっていた。

「同調（トレース）、開始（オン）。魔力（エナジー）、充填（オン）」

静かに呟いて、魔術回路から魔力を流し込む。すると、カードの表面が輝きだし、絵柄がはっきりとしてくる。

そして、その絵柄がはっきりとしてきた瞬間……

ガサガサと、背後の茂みから誰かが音が鳴った。咄嗟にネオはその方に振り返り、戦闘体勢をとった。

するとそこには、同じく戦闘体勢を取っていた白髪赤眼の少年が、

彼の方をキッと睨んでいた。

「……あんた、誰だ？」

ネオはカードを右腰の薄いカードホルダーにしまいながら、そう問うた。すると、白髪の少年――――ハセオはフッと鼻で笑い、戦闘体勢を崩す。

「この際、名前はどーでも良いんだけどよ。一つ話がある。その――――」

ハセオは彼の右腰のカードホルダーを指差し、口調を全く変えずに、今度は逆にネオに問い掛けた。

「今のカード、渡してくれねぇか？　かなり危険なもんだからよ」

「――――――断る、と言ったら？」

そう返答し、いたずらっぽく笑った。それは、明らかな挑発だった。口元は吊り上がっており、彼を取り巻く空気が変わった気がした。

その空気は、まさに殺気。彼が今までに、一度も体感したことの無いような、濃く深い殺気だった。

（チっ。これは、ちょっとヤバ気だな）

そう思ったハセオは、前に出していた右足を下げ、後ろポケットにある自分のデバイスに手を伸ばす。

しかし、その一瞬の隙を彼が逃す筈なかった。

「――――っ！」

咄嗟にハセオは前方に障壁を展開し、『いつの間にか来ていた右正拳』を防ぐ。それを一瞬だけ防いでから距離を離し、素早くデバイス『スケィス』を展開、紫色の手袋に黒基調のバリアジャケットに換装し、両手に無骨な双剣を背中から展開する。

「スケィス。見たか、今の一発」

『はい。あの一瞬で張れる、最大出力を出した筈ですが……』

先程相手が放った一撃を、ハセオは思い返していた。

今の一撃は、彼の張った障壁を一発で破壊しかねないものだった。一瞬だけ防いだ際に、障壁に巨大なヒビが入ったのだ。

「――――ほぅ、振り切る前に気づいたか」

そう言う彼は、右拳を振り抜いた形で静止しており、拳からはわずかに煙が出ていた。もしも直撃していたら、と考えると、たまったもんじゃないだろう。

「それは、魔法か？」

「魔法？　魔術じゃなくてか？」

ハセオの言葉に首をかしげたネオは、再び突撃の構えを見せる。それに合わせるように、ハセオも双剣を逆手に持って構え、トリガーを引く。瞬間、双剣から一発ずつ空薬莢が排出される。

（……何か仕掛けてくる。だったら、使いたくないけど――――）

右腕をきゅっと横に伸ばし、脳内にイメージを飛ばす。

――イメージしろ。イメージするモノは、常に最強の自分だ――――いつか彼に言われた、その言葉。今は彼はいないけど、いつか会うことになると分かっているから。だから、俺はそれらを全て投影（つく）る。

「投影（トレース）――――」

投影するは、あの国を統べ、王となった少女の剣。黄金の輝きを放つ、彼女の剣。記憶と心身に刻まれたあの剣を、今彼は顕現させる！

「開始（オン）！」

右腕が光り輝く。手のひらから黄金の光が漏れ、いつの間にか暗くなっていた空を昼間のように黄色く照らす。そして、同時にカードを入れたポケットも輝き始める。

「っ……！　だあぁぁぁぁっ！」

その光を見たハセオは、彼を打倒すべく一気に突撃する。その距離はたったの１０ｍ。その一瞬に全てを込め、彼を叩き伏せるために！

「疾風双刃！」

双剣『回式（かいしき）・芥骨（あくたぼね）』をクロスに構え、一気に引き払うことで、無防備なじょうたいにある彼の、意識のみを刈り取る。

「風よ――――」

しかし、それは彼の目前５ｍの所で彼の動きが止まり、目の前を凝視した。

そこには、純白のフワリとした騎士服を纏い、両手で『見えない何か』を握り、構えているネオがいた。

「荒れ狂え！！」

握った何かを下段から上段に向けて斬り上げるように振り抜き、嵐の塊をハセオに向かって放った。

剣☆持雑談箱！

ネオ

「相変わらず、ゲストが居ないままのスタートか」

アーチャー

「それは、この作品がまだ有名ではないからだろう？」

ネオ

「と、言うわけで、今回のアシスタントは！　かの有名な『練鉄の

英霊』！　黄金のアイツには『贋作者（フェイカー）』と呼ばれたアーチャーだ」

弓兵
「おい、なんか表示がおかしくないか？」

執行者
「ん？　気のせいだと思うぞ？」

弓兵
「そうか。で、今回は何をやるんだ？」

執行者
「今回は、本編に出てきた技の紹介だそうだ」

弓兵
「ならばさっさとしろ。早く終わらせるぞ」

執行者
「はいはい、わかったよ」

名前：レイ・ブレイザー

種類：射撃魔術

執行者
「これは、俺が放浪の旅をしていた時に、たまたま会った青〇青〇さん。通称『ミス・ブルー』に教えてもらった魔法を、俺流にアレンジしたものだ」

弓兵
「あの世界に４人しか居ない魔法使いが、そんな技を使っていたな」

執行者
「本編では書かなかったが、発動コードは三種類。一発が『スピア』。二発目以降が『ブレイク』、『スライダー』と繋がるぞ。二発連発がアークドライヴ、三発連発がアナザーアークドライヴだ」

弓兵
「まるまるパクったな」

執行者
「ま、まあ、次に行こうか」

名前：天葬

種類：固有魔術

弓兵
「これは何だ？　詳しく書かれていないが」

執行者
「これはまだ秘密だ。ネタバレになってしまうからな」

弓兵
「イメージは、どんな感じだ？」

執行者
「イメージは、ス〇ードラ〇バーのシン〇ウ・ス〇タ君の第一フェーズと思ってくれ」

弓兵
「大分適当なんだな」

執行者
「こんくらいしかないから、今日はここまでにするぞ」

弓兵
「次回、『ハジマリ』」

執行者
「夢の舞台へ、駆け上がれ！」

弓兵
「ネタパクりをするな」

三話：天の柱と戦いの始まり（２０１１／０７／２７）（後書き）

次回は、メインメンバー達とも合流します。

感想、意見、後書きゲスト募集、コラボ募集など、お待ちしております！

では、次回もお楽しみに！

四話：ハジマリと出現（前書き）

今回はネオＶＳハセオ・なのは・フェイト・はやてです。

結構、ネオの無双の気がしますが、まぁそれは、読者の感じ方次第ですので。

では、元・沫乃こと、早乙女伊織になってからの初の投稿、どうぞ！

四話：ハジマリと出現

ハセオに向かう嵐の塊。すでに目の前に迫っているため、回避は不可能。しかし、ハセオをひるまなかった。

「俺が、一人だけだと思ったか？」

その言葉のあと、嵐塊に向かって桃色の砲撃が放たれた。少しの間拮抗すると、嵐塊は爆発して消滅する。

爆煙を凝視したままネオは動かない。握った何かを一度握りなおし、腰を低くして目標がいるであろう場所に狙い定める。まさにそれは、血に飢えた肉食獣のよう。

しかし、その爆煙からは目標は出てこず……

「はあぁぁぁぁっ！！！」

代わりに、彼が一度だけ見たあの少女。金髪の少女が、黒塗りで金色の鎌を持った少女が、こちらに突進してきていた。それを見てネオは、目を見開いたまま驚き、何とか初撃を防ぐために握った何かを構え、魔力を流し込む。

‐撃っ！‐

金属と魔力刃がぶつかり合い、不協和音を周囲に響かす。金髪の少女――――フェイトは、刃を交えている少年を凝視したまま、彼に語りかける。

「何でキミは、今のカードを集めているの？　よかったら、理由を教えてくれないかな？　もしかしたら、手伝えるかも――――」

「断るっ！！」

彼女の提案を一言で一蹴すると、ネオは鍔ぜり合いになっていた彼女の鎌を一撃で払い、少し吹き飛ばしてから一気に接近して追撃に入る。

「――――なっ！」

だが、それを邪魔するように入ってきた、無数の白色の光弾によって追撃は阻止され、ネオは彼女との距離をとり、剣を構える。

彼の目の前には、先程刃を交えた金髪の少女、桃色の砲撃を放ち、彼渾身の『風王鉄槌（ストライクエア）』を相殺させたと思われる栗色の髪の少女、彼の追撃を邪魔した茶色ショートの少女、そして白髪の少年が、それぞれの得物を構えていた。

（一対多、か。シミュレーションでしかやったことないが、出来ないことはない、か）

再び剣を構えようとすると、彼の体から先のカードが飛び出し、金色の光に包まれて最初の時の茶色のスーツに切り替わった。いつの間にか、手に持っていた剣もなくなっており、わずかに金色の残滓が残る程度であった。

（お、制限時間付きか。なかなか厄介だな）

そんなことを思いながらも、彼はサッとカードを回収、心の世界に

意識を飛ばし、再び投影するために意識を集中する。

「――――投影（トレース）、開始（オン）」

瞬間的に両手に出現する、黒と白一対の中華刀。彼と対峙する相手は、その剣を見たまま動かない。今の現象に思考が追いつかないのか、ただ呆然としているままである。

ネオは、両手に持った剣を自然な形で構える。彼の持つ剣は、その昔、造り手の夫が妻の髪や爪を炉に入れ、完成させた、陰陽一対の名剣。そして、彼の持つ愛用の名剣であるその名は！

「干将と莫耶。この夫婦剣の一撃、避け切れるか！？」

名前を高らかに吠えた彼は、両手に握った二つの剣を、一気に上空へ放り投げる――――

「させるかよ！！」

しかし、彼が投げるよりも早く、ハセオが動いた。

両手に持った双剣を瞬時に消し、背中から抜き去るようにして、今度は巨大な大剣を出現させる。それを一度構え、大上段から一気に地面にむけて振り下ろす！

-轟！-

彼を中心に土煙が舞い上がり、自分達の視界ごとネオの視界を潰す。そして、彼等は察する。

（この土煙がやんだ時――――）

（――――全部決まる！！）

（この感じなら、当分は動かない。なら――――っ！）

ネオは、先程投げ損ねた二本を投げ、さらに二つ投影。さらに投擲する。

風切音を響かせながら、四本の刀はブーメランのような軌道を描いて上空へ飛び上がり、急降下して目標の四人に迫る。

更に彼は右手を空間に突き出し、一つの剣を投影し、一気に走り出す。

投影するのは彼の刀。『一度に三撃を放つ』事を可能にした彼の刀。その長い刀身は、何人たりとも寄せつけない、戦場（いくさば）を縦横無尽に駆け抜け、その切っ先は確実に敵の首を落とす閃光！

業物『備前青江』を投影したネオは、それを彼と全く同じ型で構え、目標がいると思われる場所へ駆け出す。そして、土煙が晴れた瞬間……

「取っておきだ……！」

彼は一気に距離を詰め、至近距離になった瞬間に、彼――――剣豪佐

々木小次郎の大技を解き放った！

土煙を大剣の一撃であげたハセオは、再び双剣に切り替えてからじっと周囲を警戒していた。

「ハセオくん、これじゃあどこにいるか……」

なのはが心配そうに言うと、ハセオは変わらない表情で答える。

「大丈夫です。こいつが教えてくれます」

ハセオは右手を軽く上げ、再び構え直す。そう言いつつも、ハセオは内心焦っていた。確かに彼のデバイスは、量産型やエースであるなのは達が持つようなオリジナルとは、少しばかり勝手が違う。しかし、相手は障壁をもたやすく砕く超重量の打撃を持ち、更には魔法陣の展開無しに魔法を放ったり、両手から剣を出したりしている。どうやっているのかは不明だが、実力は確かにある。それに、彼の一撃は、敵を確実に叩き潰すための一撃である。身を以って分かっている。

（次の一撃、多分、強いのが一発来る……）

そう予想し、彼は再び双剣を構え直して……

「取っておきだ！」

土煙が晴れ、そこから飛び出るように一本の刀を構えた彼が突っ込んできた。

流れるような体制で空中に飛び、青江を構えるネオ。それを待ち構えるように、ハセオは双剣をぐっと構える。

半身で青江を構えるネオの瞳は、既に上空から獲物を狙い、強靭な鉤爪を伸ばし迫る猛禽類の瞳の如く鋭い。

「秘剣――――」

半身を翻し、彼は大きく青江を振りかぶる。

「絶対（サンク）――――」

それに合わせるように、ハセオも双剣をクロスに構え、魔力を込める。

「――――燕返し！！」

「――――領域（チュアリ）！！」

瞬間、閃光とそれを防がんとする真っ赤な障壁がぶつかり合い……

……

「な……っ！」

オマケとばかりに来た、次の一発の斬撃が、ハセオの張った絶対領域(アリ)に亀裂を入れ……

-破-

最後の一発が、その障壁を完全に斬り裂いた。

しかし、それだけでは終わらず。

-斬・斬・斬・斬-

突如空中から飛来した四つの剣が、彼等のバリアジャケットを引き裂き、鮮血を吹き出させる。

「ぐ、っぉぉぉおおっ！」

しかし、それでも彼等は止まらなかった。

ハセオは、投擲された双剣四つすべてが命中するという、一番大きなダメージをくらいながらも双剣を構え、ネオに突進する。ネオは、その執念に驚き、何とか投影済みの青江を駆使して渡り合おうとするが……

「――――くっ」

ネオは青江を振るうことが出来ず、そのままバックステップで後退する。本来なら、燕返しを放った直後なのだからそのまま斬り上げれば良いだけの話である。ただし、それが先に懐へ入られていなければ、の話である。

彼が投影した『備前青江』は、五尺あまりの大太刀である。故に、戦い方は常に大振りになり、相手に接近させることなく叩き潰す戦闘をしなくてはならない。

つまり、これを投影した場合、『燕返し若しくはそれを組み込んだ連携技でトドメを刺さなくてはならない』ということになるのだ。

「くっ、投影（ブレード）、終了（オフ）」

ネオは苦し紛れに青江を消し、迫り来るハセオの双剣の軌道を読む、そして、その軌道に割り込むように、寸分違わず得意の右正拳を叩き込む！

- 撃 -

爆音とともに、刃面と青く光る拳がぶつかり合う。そして、ハセオは更にそこから追撃をかけた！

「そぉらっ！」

「――――ぐっ！」

ぶつかり合ったところを軸に取り、ネオの腹部に右回転蹴打を見舞った。流石のネオも、今の攻撃は予期していなかったのか、ガードすらままならず、直撃を喰らって右方向に吹っ飛ぶ。

「教導官、今です！」

チャンスと判断したのか、ハセオは後ろに居た『既に発射体勢に入

っている』なのはに声をかけた。

「バスターっっ！！」

瞬間、最大まで収束された桃色の砲撃、エースオブエースの十八番『ディバインバスター』のトリガーが引かれ、放たれた。

ネオには、それを回避する術などなく、瞬く間に砲撃に飲み込まれた。

目前に迫る桃色の砲撃。

もはや彼に避ける術はない。しかし、彼は知っていた。

避けられないのなら、避けなければいい。直撃さえ受けなければいいのだから。

いつぞや誰かが言った言葉を思い出した彼は、吹き飛びながらも地に足をつけ、グッとブレーキをかけながらココロの世界に意識を飛ばす。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ」

何故その言葉が出てきたのか。彼にはさっぱり分からないだろうが、そんなのは関係ない。ただ、今の彼には『目の前に迫る超威力の砲撃を防ぐ』という思考しかなされていない。故に彼は、それを防ぎ

切るために射程技に対して絶対の防御力を誇る盾を、丘から引きずり出す！

「『熾天覆(ローエ)う七つ(アイアス)の円環』！」

現れたのは、薄桃色に輝く四枚の花弁を持つ、花形の盾。投擲系に絶対の防御力を持つ『熾天覆(ローエ)う七つ(アイアス)の円環』は、放たれた桃色の砲撃も一枚の半分になった花弁を残して何とか防ぎ切る。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ――――」

息を切らせながら、ネオは右手を突き出したまま立ち尽くす。既に体はボロボロだが、彼の瞳はまだ死んではいない。目の前には、自分を確実に倒したと思っていた彼等が、信じられないというべき表情でネオの事を見ていた。

今がチャンス。そう悟ったネオが、彼等に反撃を与えようと一歩踏み出す。が

「――――ぁっ」

そこで彼の膝が折れかけ、体が斜めに傾いた。さっきの残骸と、今の乱入者との連戦が、少なからず膝に響いていたのは分かっていた。それが、今の砲撃を防いだので爆発したのだ。

（くっ、まっず……）

咄嗟に足に力を入れようとしたが、既に間に合わず、その場に膝を付いてしまう。額からは尋常じゃない程の汗が流れ出て、両足、特に踏み出す際に体にブレーキをかけていた右足がガクガクと痙攣を

起こしていた。
動けないのを見てか、白髪の少年が彼にゆっくりと近づいてくる。

「……勝負はついた。だから、カードを渡せ。これ以上、無駄な戦いはしたくない」

ハセオはゆっくりと右手を差し出し、カードを渡すよう要求する。
それに対して――――

「――――んな」

ネオがキレた。

「え――――」

「ふざけんじゃねぇっっ！！」

殆ど本能が赴くまま、ずいぶん前から腰に差してあった刀を抜きはなった彼は、限界に達した体など知らないとばかりに立ち上がり、刀を横薙ぎに振るった。ハセオはそれを紙一重で回避し、再び双剣を構えたところで――――

「な――――？」

目の前に佇む、少年（ネオ）の雰囲気が一変したのに気がついた。それは、

言わずもがな彼の放つ殺気。その殺気が、戦闘が始まった時とは比べものにならないほど、彼の体から放出されていた。

彼は、ハセオに向かって一歩踏み出す。それに合わせて、ハセオは一歩退がろうとした瞬間――――

「――――っ！？」

６０？程の赤黒い刀身の刀を逆手に持ち、既に振りかぶっているメガネを外した少年（ネオ）が『目の前』に現れていた。

「ふっ――――」

「くっ――――っ！」

その鋭い一閃を、ハセオは双剣をクロスに構えることで受け止める。

-撃！-

ハセオは、受け止めた一撃のあまりの重さに、苦渋の表情を浮かべる。膝を曲げたくなる衝動にかられるが、ここは何とか我慢し、しっかと相手を見つめる。

「――――ネオ」

「は？」

「ネオ＝フラガ＝マクレミッツ。それが、俺の名前だ」

「――――ハセオ、ハセオ＝ミサキ。時空管理局陸士第６０５隊所属、二等陸士だっ！」

鍔ぜり合いになりながら、互いに初めての自己紹介を交わす二人。
それと同時に、ハセオは受け止めていた刀を一気に振り払い、思い切り地面を蹴って後退する。それを見たネオは、追撃とばかりに地面を蹴り、一気に距離を詰める。その速度は、先程倒れかけたとは思えないほどの速さであった。

（ハセオくん、そのまま後退してて！）

なのはから不意に飛ばされた念話。それに従い、ハセオは時折ネオから繰り出される鋭い横薙ぎや振り下ろしの一閃を双剣で受け止めては弾き、受け止めては弾き、を繰り返していた。

そして、そんなことを九回繰り返した、次の十回目――――

「シューーっト！！」

そんな鋭い声とともに、ハセオを避けるように彼の真後ろから桃色の光弾が無数に飛び出した！

それがハセオの横をすり抜けるように通り抜け、真っすぐにネオに向かって行くのを見て、

（――――決まった！）

ハセオは核心めいた表情をし、一気に距離を離した。

彼女の放った射撃魔法『アクセルシューター』は、自身の直線上なら段幕を張ることが出来、数個ならば誘導できる。さらには、一つ一つがそれなりに圧縮してある魔力の塊だ。それを今、彼女は２５

個まとめて射出した。

なのはの十八番『ディバインバスター』が防がれたときは流石に焦ったが、アレは一発のみだったから。それなら、この数は全て撃ち落とせまい。そう考えていた。

しかし、目の前にいる彼は、ハセオの想像をゆうに越えていたのだ。

「――――」

ネオは一度立ち止まり、向かってくる魔力弾を凝視してから、逆手に持っていた刀身二尺の愛刀『白龍』を順手に持ち替え、腰の辺りに構えて待つ。

そして――――

「――――直死」

- 閃 -

まさに一瞬の出来事。小さな言葉とともに、桃色の弾群をネオがすり抜け、魔力弾が全て停止した。順手に持った白龍は、腰の鞘に半分ほど収まっており、ゆっくりとしまっていき――――

- 鈴・滅っ！ -

チンッ、と言う鋭い音ともに刀身をしまうと、停止した魔力弾が全て消滅した。

驚愕の表情をしたまま、その場に固まるハセオとなのは。いくら即

興のコンビネーションだからとは言え、決まる確率はほぼ１００％と考えていた。しかし、その結果がまさかのこれとは。

（これは――――）

（――――想像以上ね）

二人で似たような思考をするハセオとなのは。しかし、ほうけていられるほど彼等に余裕はない。

なのはが接近戦に不向きと判断したネオは、再び腰の辺りに構え、地面を強く蹴ると、なのはに向かって勢いよく飛び出す。

「速っ――――！」

数十メートルの距離を一瞬にして５メートルほどに詰めたネオは、目の前に迫っているなのはに目掛けて、白龍を横に大きく振りかぶる。それに合わせて、なのはが障壁を張ろうと右手を突き出す。

しかし、その瞬間――――

「――――？」

ネオの足が止まる。振りかぶられた刀も、なのはに触れるより前の辺りで止まっている。それを見て、彼女は彼から距離を取り、愛機である『レイジングハート』を構える。

「チッ、興が冷めるようなことを」

刀をしまいながら、そんなことをつぶやく彼。すると、なのはの構

えたレイジングハートが主に知らせた。

《マスター！　周囲から魔力反応、数は３０！》

彼が「興が冷めることを」と呟いた原因を。

「■■■■■■■っ！」

「■■■■！　■■■■！」

「■■■■■■■■■■！！！」

ネオを含む五人は、何者かに囲まれていた。声にならない叫び声をあげる『それら』は、それぞれ遠目で見れば普通の一般人と大差変わりないだろう。しかし、瞳に明かりは無く、肌は真っ黒に煤けている。まるで、一度炎に焼かれたように、真っ黒になっている。

「なんなんや、こいつら――――」

はやてがシュベルトクロイツを構えながら、その場にグッと構え……

「――――クラウ・ソラス！」

それらの一帯に向けて、砲撃を放った！それが異形のうちの一体に直撃すると、周りを巻き込んで爆発した。

はやての放った『クラウ・ソラス』。これは砲撃魔法の中に、炸裂爆破の能力を付与したもので、着弾と同時に周囲に広がって爆破する、魔力量が多いはやてならではの豪快な砲撃魔法だ。たいていの

魔導士は、これを喰らえば一撃で昏倒させられる威力を持っている。

しかし――――

「■■■■■■っ！！　■■■■■■っっ！！」

それらは止まらなかった。しかも、あれだけ大威力の砲撃を喰らっても尚立ち続け、無傷である。

「なんなんよ、こいつら」

「……」

はやての放った砲撃にさえびくともしない奴らを見て、ネオは一度空を見上げ、無言のまま瞳を閉じる。

「全く、巫条ビルと言い小川マンションといい、俺はなんかに憑かれてんのかねぇ」

そんなことを呟きながら、彼は瞳を閉じたまま正面を向き、かけていたメガネを外し、下がっている左側の前髪をかきあげた。

「相変わらず、確かにこいつらは魔的だ。だったら――――」

再び投影。今度は投影して一番使い慣れている刀『小烏丸天国』を右手に持ち、一度しまった白龍を左手に持つ、二刀流で構え――――

「――――殺さなくっちゃなぁっっ！！」

その一言で、ネオは勢いよく奴らの群へと飛び出して行った。

四話：ハジマリと出現（後書き）

今回の後書きコーナーは、諸事情によりお休みです。

次回

～五話：魔眼と蹂躙

次回もお楽しみに！

五話：魔眼と伏線という名のサプライズ（前書き）

新年度になっての初投稿です。長らくお待たせしました。

では、どうぞ！

五話：魔眼と伏線という名のサプライズ

銀色の閃光が戦場をかける。

その度に異形が真っ二つに断ち切られ、血飛沫が宙を舞う。二つに分断された異形は、一瞬だけ宙を舞い、すぐにボトッと地面に落下する。

そんな、自らが作り出した死体の傀儡（くぐつ）――――死人形（デスドール）が一瞬にして散り飛ばされるのを、彼は遥か上空から確認していた。

「おォう、流石は冬木の魔眼使い。案外、両儀の魔眼使いと互角かも知れねェな」

赤い瞳に、時折火の粉のような魔力粉が飛ぶ赤い髪。黒い甲冑に黒いマントといういで立ちの『炎髪灼眼』の二つ名を持つ彼は、眼下に広がる無双を見て、その評価を淡々と下した。《だが、彼は今はあれが限界だろう？　先の戦闘で、大分手負いになっている。仕留めるのはたやすいはずだが？》

しかし、その評価に口を出すものがいた。正確に『もの』と言っても、者（ひと）ではなく物（しな）である。

それは、真っ赤に輝く宝石を頂点に携えた、真っ黒の杖だった。宝石は炎の如く真っ赤に輝いており、本体はその赤を飲み込むかの如く、漆黒に染まっている。

「ンなこったァ、今の奴を見れば解っている。それに、今はまだ――――っ！」

その杖に文句を言った彼は、「時期じゃない」と言いかけて、言葉を口に含んだ。そして、何かを感じ取り、肩にかけていた杖型のデバイス『ローレライ』を構えた。それと同時に、ローレライからけたたましいばかりの警告音が鳴り響く。

《マスターアカネ。正面距離１００に次元転送反応。数は一。この反応に、この速度、まさか――――っ》

「あァ、今捉えた。ちっ、早過ぎンだよ、お前はよ――――」

ローレライの言葉に対してか、小さく愚痴った彼は、足元に高速転移魔法陣を形成。いつでも転移できる準備をしてから、杖先を相手に向ける形でローレライを構え、彼――――飛鳥紅音（あすかあかね）は不敵な笑みを顔いっぱいに浮かべ――――

「――――鷹也ァ！！」

今は相対する、幼なじみの名前を大きく吠えた。

彼は、異形の腹に愛刀『白龍』を突き立て、真っ直ぐに脳天目掛けて斬り上げる！

「■■■■■……」

声にならない声を上げ、異形は真っ二つになってその場に倒れる。

刀身に着いた血糊を払い、再びネオは異形達を睨みつける。

周りを見渡すと、３０体ほどいた異形達も、今ではずいぶんと減少し、あと１０体というところにまでなっていた。

しかし、そんな良い結果に、必ずと言って良いほど代償は付き物である。

「はぁ、はぁ、はぁ――――」

そう、すでに彼の体は限界を超えた状態にあった。３０体もの異形達の猛攻を受け、体中はボロボロ。頬は切れ、肩や頭からは血が流れ、意識も軽く飛んでいる。既に、野性的本能だけで戦っているようなものである。

そして『また』――――

「■■■■■っっ！！」

異形の内の一体に、背後を取られた。

「――――っ！」

ネオは咄嗟の判断で身を翻し、振り下ろされる鋭い爪攻撃を寸前のところで回避し、右腕を掠める程度で終わらせる。

しかし、喰らっただけで終わらせないのが彼の信条。一発喰らったら、それを倍返しにして相手に叩き返す！

「――――失せろ」

-閃・斬-

瞬間、一閃。目で追えないほどの速度で振るわれた白龍の刃が、異形の肩に食い込み、その胴体を袈裟に真っすぐ断ち切り、追撃とばかりに小烏丸でX字に斬り伏せた。しかし、これだけの事をやって、外見的な代償だけで済むはずが無く――――

「――――ぐ、ごほっ」

その代償として、口から血を吐いた。幾度となく殴打を喰らった彼は、内蔵にかなりのダメージが溜まっていた。

「――――ごほっ、かほっ。チっ、この、野郎っ！」

自分自身の体に、そして今だ周囲を取り巻いている異形達のしぶとさに悪態をつきながら、ネオは異形の一体から振り下ろされたゴルフクラブを前に転がって回避すると、再び飛び出す為に身を翻して白龍を逆手に持ち直す――――

「消え――――ガハッ！」

しかし、飛び出す前に腹部に鈍痛。それと共に肺の中の空気が一気に無くなる感覚に陥り、数メートル吹き飛ばされる。

飛ばされる視界の端に、どうやらボディブローを放ったであろうガタイの良い男性だっただろう異形の姿を確認した。

しかし、今からでは反撃もままならない。それに、ブローを放った

異形が、追撃とばかりに一気に距離を詰め、振りかぶって――――

「疾風双刃！！」

別の声が聞こえた瞬間、八つ裂きになって切り裂かれた。

吹っ飛ばされている中、今の出来事で意識をはっきりさせた彼は、空中で器用に受け身を取ると、ふらついた状態で着地する。

すると目の前には、先程まで生死を争う戦いをしていた白髪の少年――――ハセオが、両手に持った双剣についた血を払いながら、ネオの事を見ていた。

「お前、こんなもんじゃないだろ？」

「……？」

無言のままネオは立ち上がると、ハセオと肩を並べ、白龍を納刀して魔術を使用。干将と莫耶を投影し、再び異形達へ一気に駆け出した。

「……はぁ、ったく、ホントに化物だな、アイツは」

そんなことを言いながら、ハセオもまた、ネオの後を追うように駆け出した。

その頃、ネオ達の気づくことのない遥か上空。

そこで、灰色と赤の光がぶつかり合い、閃光を伴って爆発し、至近距離で相対していた二人を一気に吹き飛ばす。

「カハハッ、キャハハ♪」

「くっ、この……！」

爆風に吹き飛ばされながらも狂喜の笑みを浮かべながら、彼、飛鳥紅音は漆黒の杖を振るい魔力弾を形成、配置。そして、今は自分と相対し、今日は自分を捕まえに来た幼なじみに向けて、それらをすべて解き放つ！

そして、放たれた先にいる少年。黒髪のオールバックに茶色の瞳、紫色の羽織りに白の袴という和装のいで立ちの彼、西ノ宮鷹也（にしのみやかや）は、両手に持った銀と金の刀身を持つ刀を構え――――

「疾風双龍壱之型、拡散！」

突風を纏わせた両方の刀を振るい、拡散する竜巻を放ってそれらをすべて相殺した。

しかし、その相殺を見て、紅音は不満そうな表情を浮かべて。

「どォしたどォしたァ？！　守ってばっかじゃねェか！　少しは――――」

瞬間、周囲に散布されていた魔力が、彼の持つローレライの杖先に収束していく。それを確認した鷹也は、両手に持った雌雄一対のデ

バイス『銀風』と『金氷』をクロスに重ねて構え、受けの体勢を作る。

「攻めて来いよォ、三下がァァっ！！」

咆哮とともに、紅音は収束した魔力を、一気に一つの砲撃『シュタルクバスター』として解き放った！

ローレライから放たれた深紅の砲撃は、四つの軌跡を以って空をかけ、鷹也へと向かっていく！

しかし、鷹也は動かない。四方から迫る紅蓮の砲撃を見つめたまま、ゆっくりと銀風と金氷を翼のように広げた形で構える。風が、冷気が、それぞれ一気に彼の体に纏われ、折り重なり、吹雪となって吹き荒れる。

「霜天に座せ、金氷。天空へ舞え、銀風――――」

短い詠唱とともに、その吹雪は更に厳しさを増す。空気は凍てつき、吐く息は白くなる。そして――――

「絶対零度！」

瞬間、鷹也を中心に、氷結の風が吹き荒れた。

『絶対零度』。鷹也の誇る、唯一の迎撃儀式魔法であり、捕縛魔法である。彼が持つ変換資質『氷結』と『疾風』、この二つを利用して、吹雪を巻き起こすSランク魔法だ。当たってしまえば――――

「お、おォ？　おォォォォ！？　鷹也ァ、いつの間にそんな豪勢な

魔法を覚えたんだ？」

誰が放ったかなんて関係無しに――――つまり、敵味方関係無しに、放たれた魔力射砲撃系の魔法を全て凍結させ、無効化させる。そして――――

「行くぞ、紅音ぇぇ！！」

「チッ、一手先に行かれていたか」

術者を、一時的に凍結による行動不能にさせることが出来る！

故に、紅音は今、体がほとんど動かせない無防備な状態にある。ローレライを構えた形で、全く動けない紅音は、ただ真っすぐ突進して来る鷹也を見つめたまま、動かない。そして、

「たあぁぁぁっ！！」

刀身に魔力を宿した銀風の刃が、彼の腹部にむけて振るわれる時――――

「――――♪」

不適な笑みを浮かべて、鷹也の顔を真っすぐに睨んだ。瞬間――――

-キィィィィン！-

「くっ、そ！」

その刃が、寸前で何か見えない壁にぶつかったかのように停止し、

反対方向に弾かれた。それにより、銀風を握っていた鷹也の右手は、骨折とまでは行かないがかなりのダメージを負ってしまった。

「あ〜ららァ？　鷹也、忘れたわけじゃねェだろォ？　俺のレアスキルをォ？」

「くっ、反射（リバース）、だったよな、確か」

「その通り！　ンじゃ、さっさと――――」

そこまで言って、鷹也は思い出した。『絶対零度』は、制限時間付きで、その時間は、術者のの力量ではなく、受けた者の力量によって変わっていくモノだということを。そして、今目の前にいるのは――――

「失せろや、三下ァ！」

自分より遥かに力の勝っている、反則だという事を。

《シュタルクバスター》

- 煌 -

瞬間、ローレライから放たれた深紅の光は、瞬く間に鷹也を飲み込み、爆煙と共に消滅した。

「これで――――」

白龍と小烏丸を両居合に構え、異形の一体に肉薄し、

「ラストぉっ！」

斜めＸ字に、その体を切断した。

それを期に、投影した小烏丸は消滅。唯一残った白龍を背中の鞘に納めると、彼はその場に座り込む。まさに疲労困憊、満身創痍と言ったところが、今の彼を表すのに一番適していると言えよう。

そして、彼、ネオの隣に立ち尽くすハセオもまた、疲労困憊の表情を浮かべていた。

「こいつら、何だったんだ？」

「さぁ、な。俺に聞かれても、困る……」

そう言うと、ネオはそのまま横に倒れた。真っ正面で倒れられた彼を心配するようにハセオが顔を覗き込む。すると――――

「すぅ、すぅ、すぅ――――」

「……寝てやがる。ったく、終わったら終わったでこれかよ」

軽く文句を言いながらも、彼は仕方ない、という表情をして、彼をおぶる。一定の周期で寝息を背中で立てる彼を一瞥して、そのまま少し前に約束した合流地点へ向かう。

それから幾刻か過ぎて、次元航行艦『アルバリオ』。
ミッドに伝わる、黒い伝説の龍をイメージしたその艦内に、彼女は居た。

「タチバナ執務官！」

声をかけられて、藍色の着物を着た髪の長い少女は振り向く。パッチリとした紫色の瞳に、長い黒髪。端正な顔立ちに、腰には護身用なのか、小太刀が差されている。

「どうしましたか？」

彼女、ライカ＝タチバナは、後ろから声をかけてきたクルーの一人にそう短く尋ねた。

「えぇ、艦長がお呼びなのですが」

「艦長、がですか？」

えぇ、と答えるクルー。ライカは、ここの艦長とあまり仲が良くない。この艦が次に行く場所と、彼女の次の任務先が重なった為、少し強引に乗せてもらったのだ。それゆえ、彼と彼女の間にある亀裂が余計広がった、ということなのだ。

（はぁ。あの人と話すの、あまり得意ではないのですよね）

（そんなこと言っちゃダメだぞ、ライカ。我慢だ、が・ま・ん）

（分かってますよ、揺光。）

そう自分の髪留めになっている相棒に答えると、軽くため息をついてから、踵を返してもと来た道を戻って、艦長のいるブリッジを目指した。

数分後、ブリッジ。

その中央で、異様に重苦しい雰囲気に包まれていた。

「で、お話とは何ですか、艦長？」

ライカが話しかけたのは、机を境にして向かい合う男性。黒髪混じりの白髪に、シワの目立つ顔。ぱっと見で『初老の男性』というイメージ。しかし、それを覆い隠すかのように、彼の体から魔力が溢れていた。

「うむ。それはの、とある人物を捕まえてほしいのじゃよ」

そう彼――――ルルーシュ・ヴェルフラムが答え、瞬時に幾つものモニターが出てくる。それらは、文ばかりのモノも多くあるが、それより多いのが、黒いフード付きコートを身に纏い、右手に身の丈よりも大きい薙刀を持ち、血の海に佇んでいる人物の写真である。

「所属、出身地、詳細データ、その他諸々が不明のこやつは、ただ一つ、『薙刀』という異世界の武器の形をしたデバイスを使用することだけが解っとる」

モニターをすべて消去し、代わりに一枚のデータチップを彼女に差し出す。渡された瞬間、ライカはそれが何を意味するものか、はっきりと分かってしまった。

「ルルーシュ提督、これはもしや、私に今の任務を放棄して、貴方のプライベートな任務を優先しろと、そうおっしゃりたいのですか？」

少し強引に攻勢に出たライカは、鋭い眼光でルルーシュを射止めた。たいていの人なら、その鋭い視線に物おじするのが普通だが、しかし、彼はそれにまったく怯まず、寧ろ楽しそうな表情を浮かべた。

「そうじゃよ？　それに、その許可はもう取ってあるし、別の執務官に引き継ぎはしてある。何も問題はないはずじゃがのう？」

――――ちっ、あんのジジイ、手回しが早過ぎるっつうの――――

そんなことを内心毒づいたライカは、ため息一つつくと、諦めたという表情を『一瞬だけ』すると、すぐに意味ありげな表情に切り替わり、問うた。

「では、これは『探偵としての私』へのということで、よろしいでしょうか？」

「勿論じゃ。報酬は、あとで払うからの、ちゃちゃっと行ってきて

おくれ」

簡単に返された。

ルルーシュ＝ヴェルフラム。ライカはこの時、改めて相手にしてはいけないと、感じたのであった。

剣☆持雑談箱！

ハセオ
「今日の司会は、ネオに代わって俺が務めさせてもらうぜ！」

なのは
「ハセオ君、少し聞いて良いかな？」

ハセオ
「はいはい、何ですかなのはさん？」

なのは
「今回出てきた異様な新キャラの数は何？」

ハセオ
「え～っと、あれは……（台本をめくる音）……あ、あったあった。どうやら、メインのＳｔｒｉｋｅｒＳ編に関係してくるキャラクター達らしいですね」

なのは
「それにしても、何人か聞いたことのあるような名前が……？」

ハセオ

「それは、気のせいです。きっと」

なのは
「そうだよね、気のせいだよね」

ハセオ
「あと、読者の皆様にちょっとした募集があります」

なのは
「作者さん曰く、敵キャラクターの募集だそうです」

ハセオ
「詳しいことは、このあとの後書きに載せときます」

なのは
「では、次回予告へ！」

ハセオ
「感想、質問、コラボの依頼、後書きコーナーへの出演等など、お待ちしています！」

次回予告

海鳴に来た魔術師は、先の相手の本拠地（ホーム）に居た。

身体はぼろぼろ。だが、彼は戦う。

机上の決戦。それは口論と言う。

次回

『魔法と魔術』

その青い瞳は、何を写す？

五話：魔眼と伏線という名のサプライズ（後書き）

敵キャラ募集について、説明させていただきます。

感想、もしくはメッセージに『名前、年齢、使用術式、魔力量ランク、魔導師ランク、容姿、その他備考、デバイス詳細、使用魔法』をご記入の上、送ってください。なるべくメッセージで送ってもらえると、作者は嬉しいです。

では、次回もお楽しみに！

六話：彼と彼女達（前書き）

ずいぶんお待たせしました。

スランプやら何やらが重なってしまい、すみません。

相変わらず、出来は余りよくないですが、よろしくお願いします。

六話：彼と彼女達

ＳＩＤＥ　ネオ

「――っぁ、ここは？」

知らない天井で目が覚めた俺は、すぐに上半身を起こし、自身の状態を確かめるために、同調を開始させる為に一つの言葉を呟く。

「同調（トレース）、開始（オン）」

唱えると、頭の中に凄まじい情報量が滝のように一気に流れ込んで来る。

――肉体的損傷、中の上。日常行動に支障無し。全力戦闘不可能――

――魔力減少率、６５％。魔術回路、全１６３本正常稼動。術式不明の回復魔術が発動中――

――投影魔術は基本使用不可。しかし、省略登録している、小烏丸天国、干将莫耶、黒鍵のみ使用可能――

……何だろう。この中途半端に動けますよ、って言う状態は。まぁ、日常行動に支障が無いってだけ、安心か。追加情報で、戦闘終了からすでに３６時間が経っていたと分かった時は、少し驚いたが。

とりあえず、次は自分の置かれている状況を調べるため、俺は寝て

いたベッドから下りる――――

-コンコン-

瞬間、部屋のドアがノックされる。

わずかに身を乗り出しそうになったが、警戒は怠らない。無言で投影を発動、某神父達が使う黒鍵をなんとか投影し、ベッドの中に隠し、握り締める。

「……どうぞ」

控えめにノックに答え、何事も無いかの様な状況を作る。

ゆっくりとドアが開かれ、入ってきたのは金髪の少女。先程、俺が戦っていた少女だ。あの時はツインテールだったのに、今は全ておろしている。

「あ、目が覚めたんだ。良かっ「――――何故保護したんですか？」え？」

俺は彼女の言葉に割り込むように言うと、彼女はポカンとした表情になり、それに乗じて俺は一気にまくし立てる。

「先程まで敵対していた私を、何故保護したのですか？　あまつさえ、こんな助けるような真似までして。もしかしたら、ここで私が暴れだすかもしれないんですよ？」

そこまで言うと、少女は少し驚いたような表情になるが、すぐに元の柔らかく微笑んだ表情に戻り、俺の瞳を真っすぐ見つめる。

「それは、貴方に聞きたかったから。そのカードが何なのか、君は誰で、何故カードを集めているのか、ってね」

その瞳を見て、俺は投影した黒鍵を静かに消滅させ、ゆっくりとベッドから下りる。

「先ほどは失礼いたしました」

場所を同じくして、ハラオウン家。そこのリビングルームにて、テーブルを囲んでいる五人。その中の一人、ネオが座ったまま深々と頭を下げた。

それは、先程の戦闘行為の謝罪であり、先に手を出してしまった側として、当たり前のことだと彼は思っていた。

しかし、前にいる五人、正確には、先程の戦闘を行った四人は、そんなことは気にしていないと言った。

「それに、そっちが集めているモノを、急にこっちが寄越せ何て言ったら、普通は怒るよね」

そう続けたのは、ネオの右隣りにいる栗色の髪の少女。高町なのはである。彼は、あの時は万全ではなかったとはいえ、セイバーのクラスカードを夢幻召喚（インストール）して放った、ほぼ全力の『風王鉄槌（ストライクエア）』を相殺した彼女の砲撃を褒めていた。

「そ、そう？　何か、嬉しいな」

「それより、そろそろあなたが何で、そのカードを集めているのか、教えてくれない？」

そう言うのは、ネオの左隣りにいるフェイト。僅かにでも興味があるのか、少し瞳をキラキラさせている。少なくとも、そんなエフェクトが彼には見えている気がした。

「あぁ、そうだな。では、ボチボチ話し始めようか」

それから、彼は自分の事からひとつひとつ、ゆっくりと話し始める。自分が北欧魔術協会の一員であり、そこの協会の支部である、冬木市内の教会に所属を置いてあること。自分が『伝承保菌者（ゴッズホルダー）』と呼ばれており、現存するとある宝具を保持していること。他にも、教えることの出来る範囲で、自分の事を教えた。

「それで、このカードだが……」

そして矢継ぎ早に、彼は腰のカードホルダーに仕舞っていた一枚のカード――――サーヴァント『セイバー』のカードを取り出し、テーブルの中央に寄せる。

「このカードは、クラスカードと言う」

そしてネオが、教えられる範囲で詳しく説明をしようとして、カードを指でつまみ上げる。

「このカードは、地球上に存在する『英霊』の力を顕現させること

が出来る」

「英霊？」

根尾が出した単語に、フェイトが首を傾げる。

そこから説明しなくてはいけないか、とネオは気づき、軽くため息をつきながら説明を開始する。

「英霊ってのは、過去に存在したとされる英雄の魂。それが、まぁ、とある争いの時に七つのクラスとして、一時的に復活するんだ。んで、このカードが……」

ネオは、つまみ上げたカードに少しだけ魔力を送り、絵柄を写し出す。ゆっくりと映し出されていくのは、剣を構え、赤い羽飾りのついた銀色の甲冑。

「『セイバー』のカード。説明は長くなるから省く」

それだけ言って、カードを腰のホルダーにしまうネオ。すると直後に、なのはからの質問が飛んだ。それを皮切りに、ハセオ、フェイトからも質問が飛び、それを受けてから答え、逆にネオが質問する、というやり取りが、小一時間ほど続いた。

第一管理世界ミッドチルダ。

首都クラナガン。
郊外にある、日本風の大豪邸。そこに彼女はいた。
「――――――」
彼女の耳へ届く音は、そよそよと吹くそよ風と、空を舞う小鳥達の可憐な鳴き声。そして、ピンと張り詰めた緊張の糸。
「――――――ふぅ」
体に溜め込んでいた空気を軽く吐き出して、再び、ゆっくり大きく吸う。そして、構えた和弓を構え、弦を引く。キリキリと弦が絞られる度、少し、また少しと緊張の糸が強くなる。
そして、それが最高潮に達した時――――。
「――――はっ」
つがえられた矢が、目標に向かって一直線に飛んでいく。そして間もなく、
- カン -
渇いた音を周りに響かせ、『通産百発目』の矢を目標の中央に命中させた。
『よ、さっすが師範代。よく当てますな』
「そうでもありませんわ、コーラル。こう見えて、右にわずかに動

いてますもの」

そんな会話を交わすのは、矢を放ったロングの黒髪の少女フローラ＝カルティスと、彼女のデバイスである、今は花形の髪飾りになっている『コーラル』の、一人と一機。管理局員として今も名を馳せ、地球の極東の島国で覚えた『弓道』をベースとした『流天式弓術』の師範代でもある。

「しかし、解せませんわね。何故今更になって、こんな文書が……？」

フローラは、来ていた巫女服の帯の辺りから一枚の折り畳まれた文書を取り出し、広げて読み上げる。

「依頼内容は、とある違法魔導師の確保。目標の名前は――――」

『オーヴァン＝ガルディオン。史上最強と謳われた狙撃手で、とある事故から行方知れずになっていた局員、か。何故今更になって、こいつが？』

そう、数日前から起きている魔導師連続殺人事件。それの犯人が、彼なのだ。証拠は、各現場に残されたオーヴァンのみが扱える薬莢である『碑弾』が落ちていたのと、血で書かれた『憑神を探せ』と言う彼の筆跡。憑神が何なのかわからないが、ただ一つ言えることは、これがれっきとした事件だということである。

「これは、受けないわけにはいきませんわね、父上」

彼女はそう言いながら、弓道場の壁に掛けられている『一閃必殺』の掛け軸の下に飾られている、父親の写真に話し掛ける。

『ということは、受けるんだな、この依頼』

コーラルの言葉に、一度頷くだけで答えるフローラ。そして彼女は、この任務の拠点となる場所である首都クラナガンに向かうための準備をしに、母屋へ向かった。

その頃、地球。

会談が終わり、自室に戻ったネオは、風呂に入った後のほてりを冷ますため、ベランダに出て夜風を浴びていた。

「――――ふぅ」

海が近いのに、時折吹く潮風はあまり体に纏わり付かず、寧ろ吹き抜けていくような感覚が強い。それだけ、ここの風が優しいということである。

「……冬木よりも風が優しい。あそこは、つねに戦いの中にあったからな」

彼は、つねに戦いの中にいた。聖杯戦争、サーヴァントとの戦い、悪性の起源覚醒者、魑魅魍魎、そして――――

「こんなにゆっくり、晩御飯を食べれる時が来るなんて……」

彼が振り向いて、その視線の先には、ホカホカの炊きたてご飯と、作りたての麻婆豆腐。それも、各二人前ずつある。冬木にいた頃は、食卓も一つの戦場だったため、ゆっくりと食事を採ることは、そうそうなかったのだ。まぁ、戦場になった原因は、主に冬木の虎と食いしん王のせいだが。

「まぁ、ゆっくり食べるとしようかな」

そんなとき、インターホンが部屋中に鳴り響いた。つまり、それは彼の家に来客が来たことを意味する。

「……誰だ？」

一人呟きながら、彼はゆっくりと扉の所まで行き、覗き穴から外を見る。

するとそこには、今日あったあの金髪の女性――――フェイトが来ていたのだ。

彼は、一瞬だけ探知の魔術を使用し、彼女のほかに奇妙な魔力反応がないことを確認すると、鍵を開けてゆっくりと扉を開く。

「何の用だ？」

「ぇ、えっと、特に大した用じゃないんだけど、お昼に言い忘れたことがあって……」

言いたいことがあるが、どう言えば良いか解らない、といった感じだった。彼は、そんな彼女の姿にため息をつくと、彼女に背を向けた。

「とりあえず、立ち話もナンだ。入って話せ」

そう言って、スタスタとリビングに戻るネオ。それを追い掛けて、フェイトも中に入る。

リビングに入ったフェイトは、小さなテーブルに置かれた麻婆豆腐を見て、ハッとしてからバツの悪そうな表情をした。

「ぁ、ゴメンね。晩御飯の最中だったんだ」

「……大丈夫だ、問題ない」

そんなことを言いながら、食事を開始するネオ。そんな彼を見ながら、フェイトはゆっくり話し始める。

「えっとね。私たち、昼の話の続きだけど、私たち、新しい部隊を作るんだ」

「……そう言えば、そんなこと言っていたな」

一度口の中に入っていた麻婆豆腐を飲み込んでから、そんなことを言うネオ。昼間の話とは、彼女たちの身分の話やら何やらである。時空管理局の一員であり、そこの教導官をしているなのは、敏腕執務官のフェイト、類い希なる才能を持つはやて。この三人が、近い将来、とある目的のためにそのための部隊を作るというのだ。

「それで、はやてが言ってたんだけど、君にその部隊に入ってもらえないかな、って話なんだけど……」

彼女の言葉を聞いて、ネオは箸を置いて黙り込んだ。いつものネオなら、ここですぐに了承していただろう。しかし、それが出来ないのには理由がある。

彼は、あくまでも北欧魔術協会の所属であり、更に今は長期の回収任務の途中である。つまり、ここで彼女達に協力するのが良いものか、解らないのだ。

だから彼は、

「少しだけ、待ってもらえないだろうか？　こちらとしても、答えがすぐに出せない」

そんな曖昧な答えを出した。その答えを聞いて、フェイトは少しだけ残念そうな顔をしてから、「わかった、ゴメンね」とだけ言った。

「謝る必要はない。なるべく良い答えをだそう」

ネオがフォローとしてそう言うと、フェイトは良い笑顔で「うん」と頷いた。

それから、数刻が経った。

フェイトはとうに帰宅して、ネオはベランダから空を見上げながら、一人呟いていた。

「さて、どうしたものか」

そんなことを言いながら、彼は腰に差していた二尺刀『白龍』を抜き放ち、月明かりに翳す。

そして、ゆっくりと魔力を込め、刀身を輝かせていく。すると、込めるまでは赤黒かった刀身が、ゆっくりと薄くなり、桃色に変わっていった。

しかし、それはほんの一瞬だけ。すぐに刀身は赤黒くなり、彼に苦渋の表情が浮かぶ。

「くっ、白龍じゃ、魔力の伝導率が悪い。何か、手はないか……？」

そんなことを呟きながら、彼は何故か昼間に聞いた話を思い出していた。

――――私達は、魔法、そっちで言う魔術やね。それを使うのに、サポートとして、デバイスっちゅうもんを使ってるんや――――

それは、はやてが言った一言。魔法と魔術のことを話した時、彼女はそんなことを言いながら、自分のデバイス『シュベルトクロイツ』を起動させたのだ。それに、デバイスはそれぞれ専用の機体を作れるらしく、使用する人のニーズに合わせて、作れるというのだ。

（もしかしたら、これはチャンスなのかもな）

そんなことを思いながら、彼はバッグの中に入れていたケータイを取り出して、電話帳から音峰の番号を探し出し、コールする。

奴の事だから、またかなり待たされるんだろうな、と考えていたネオだったが、そんな思惑とは裏腹に、ワンコール目が鳴り終わる前に、

『やはりかかってきたか。そろそろ電話が来る頃じゃないかと思っていたのでね』

そんなことを最初に言いながら、音峰は電話に出た。

まさか、電話の前で張っていたのか、と問い詰めたいと思う彼だったが、それは今は置いておこうと思い、グッと心の中にしまうネオ。そして、用件をゆっくり伝えた。

「昼間、こちらで魔術師に該当する者四名と接触、戦闘をし、情報を交換しあった」

『なるほど。どうせ、それでキミの力を見て、協力してくれないか、とか言われたのではないか？』

何で、こいつはこうも簡単に他人の思考を読めるのだろうか？　そんなことを心の底で思いながらも、彼は音峰からの問いに「あぁ」と短く答える。

「それで、俺はどうすれば良い？」

ネオは、思い出したかのように追加で聞く。自分は、彼女達の要望を断って単独で行動すべきなのか、はたまた協力して行動すべきなのか、その二択を、実質の上司である音峰に聞こうというものだ。

しかし、そんな彼の真面目な質問に、上司である彼はククッ、と喉

で笑いながら、

『どちらでも良いのではないか？　確かに魔術協会（うち）は、そういう極秘任務については厳しいが、向こうに知られている上、どうせ目的も同じだったのだろう？　なら、協力してカードを回収するついでに、あちらの魔術の仕組みなどを学んで来れば良い。そうすれば、今後の魔術発展に役立つだろう？』

ここまで正確に言い当てたか。確かに、情報を交換しあった、とは言ったが、それ以上言ってないのに、ここまでピンポイントに言い当てるこいつ。やはり、こいつには相手の思考を読む能力がある。絶対だ。

「参考ありがとう。後はこちらで思案させて『そういえば、』ん？」

話が終わったので電話を強引に切ろうとしたが、音峰がそれに割り込んできたため、中断。会話が再開する。

『カード、一枚回収できただろう？』

「あぁ。種類はセイバー。絵柄は剣士だった」

『……なるほど。聞けたなら良い。では』

それだけ言って、何も言わずに電話が切れる。相変わらず、自分の知りたいことさえ聞ければそれ以外はどうでもいい、という思考は変わっていないようだ。

（しかし、どちらでも良い、と来たか。全く、曖昧な答え方をしてくれる）

そんなことを思いながら、彼は備え付けの布団を敷きつつ、就寝の準備をする。

しかし、そんな彼の心も、就寝直前には揺らぐことなく固まっていたのだった。

その頃、冬木の教会。

そこでは、一人の神父が月明かりに照らされて幻想的に輝くステンドグラスを前に、じっと一点を見つめていた。

「やはり、彼も魔導師と接触したか」

まるで、自分も同じことがあったような口調で話す音峰。ゆっくりと瞳を閉じ、過去に思いを馳せようとした瞬間……

「――――ほぅ？」

不意に背後から飛んで来る、一本の短剣。もはや、短剣というには少し大きすぎるそれは、振り向いた彼の急所へ、確実に真っすぐ飛んできている。しかし、ここでむざむざ殺（や）られる彼ではなく……

「――――セット」

どこからともなく取り出した、投げられた短剣と全く同じもの――

―黒鍵を回転させながら投擲、向かい来る黒鍵を撃ち落とす。
空中を飛ぶ二本の剣は、強烈な金属音と閃光を辺りに撒き散らしながら交錯し、カランカランという音をたてながら床に落ちる。

「―――急にどうしたのかね、シエル？」

「……いえ、貴方があまりにも無防備だった為、不意を突いてあげただけですが？」

いつもと変わらない口調で、音峰は正面にいるシスターに話し掛ける。しかし、彼女のことを普通に『シスター』と呼んでしまって良いものか、という疑問が浮かび上がる。それほどに、彼女の服装が異質なのだ。

肩に載せた、小さな狐。身に纏う修道女の服。両手に持った合計六本の黒鍵。そして、異様なまでの殺気。まさにそれは、どこぞの戦闘馬鹿にも負けず劣らずの殺気である。

「それで、わざわざ単身で敵の領土（テリトリー）に突入して来るとは、どういった考えかね？　聖堂教会の弓よ」

そんな彼女を前にしながらも、瞬時に両手に黒鍵を構え、飄々とした表情で見据える音峰。まさにその姿は、一つ前の代行者と同じである。

周囲を取り囲む緊張の糸。じりじりと、間合いを一定に保っていく両者。そして、その糸がはじけた瞬間……

- 打っ -

両者の腕がぶつかり合う。瞬時に音峰がその場で左足を伸ばしてシエルの腹を狙う。しかし、シエルはその前に伸ばした手の平で蹴りを受け止め、拮抗状態になる。

「何故君は、私を狙う？　三咲にいる、真祖でも狙えば良いものを？」

「それは、そちらを狙えなくなった理由がありましてね！」

そう言いながら、捕まれていた足を払って音峰を吹き飛ばし、修道服の中から黒鍵を取り出し、回転を加えて投げつける！

しかし、それすら焦らず、音峰は黒鍵を再び投擲。向かい来るそれを打ち落とした。

再び睨み合う二人。そのまま、二人同時に腰を落とし、突撃の為に一歩踏み出そうとした瞬間……

『視界に入った金色の閃光』をバックステップで回避した。

「全く、この脳筋どもめ。貴様らは戦う事しか出来んのか？」

ガチャガチャと五月蝿い音をたてながら現れたのは、金色の鎧を纏った赤い眼をした男。金髪を逆立てた彼の後ろには、次元が歪んだかのようなふうになっており、そこからいくつもの剣や槍が現れていた。

彼の姿を見た二人は、音峰はやはりという表情を、シエルは驚きの表情をあらわにしていた。

「ほぅ、ここは、一応聞くのが相場なのだろうな。『何故現界』している、ギルガメッシュ？」

彼の言葉を聞いて、シエルは驚きの表情で金色の彼を見つめる。

そう、そこには、前回の聖杯戦争において、最後に倒された最古の英雄王、ギルガメッシュがいた。

六話：彼と彼女達（後書き）

感想、意見、質問など、お待ちしています。

敵オリジナルキャラクターの募集はまだ続いていますので、よろしくお願いします。

では、また次回にお会いしましょう！

次回

七話：両方での変化

お楽しみに！

七話：冬木の情勢、海鳴の異変（前書き）

お待たせしました。

大分遅くなって、申し訳ありませんｏｒｚ

今回は、某型月のキャラが登場します。

口調は、忘れていたので微妙です。違っていたら、指摘をお願いします。

では、どうぞ！

七話：冬木の情勢、海鳴の異変

それから、少したった冬木市。

そこの一角にある、日本風の大豪邸である衛宮邸。

台所には、僅かに白髪の交じった赤髪の青年が、学生服の上に真っ白いエプロンという出で立ちで、懸命にフライパンを振るっていた。

「ったく、相変わらずうちの女性陣は人使いが荒いってーの。まぁ、一人男がいるけどさ」

そうボソッと言うのは、登校前の大学生である衛宮士郎（えみや しろう）。第五次聖杯戦争の『記録上の』勝者であり、サーヴァント・セイバーのマスターであり、此処、衛宮邸の家主である。

元は彼一人しか住んでいなかった衛宮邸だが、昔からお邪魔していた『冬樹の虎（士郎談）』や桜を含め、今や八人の色々な人達が居候ないしお邪魔する大所帯となっている。

「……先輩、なにかお手伝いすることはありますか？」

人数分のホットケーキを焼き終えるまで、あと一枚というところで、紫色の髪の少女が、台所のドアからヒョコッと控えめに顔を出した。

彼女は遠坂桜（とおさかさくら）。士郎の大学の後輩で、『マキリの杯』と言う二つ名を持つ魔術師で、サーヴァントであるライダーのマスターである。家庭的で面倒見が良いことから、大学内で昨年行われたミスコンで、見事グランプリを果たした、という裏話があったりする。

「桜、ありがとう。じゃあ、出来上がったやつをテーブルに運んでくれるか？」

「はい！」

元気良く返事をすると、今まで培ってきた家事スキルを応用して、六つの皿を纏めて運んでいく。相変わらず、色々とすごいもんだ。

ラストのホットケーキを焼いていると、彼女に続くかのように、一人の女性がヒョコッと顔を出した。

「士郎、ちょっと良いかしら？」

黒髪をツインテールにした、少し背の高い女性。彼女は遠坂凛（とおさかりん）。遠坂家の現当主であり、『アベレージ・ワン』とも言う、『五大元素』の使い手で、またの名を『あかいあくま』。ロンドンの時計塔出身の魔術師で、成績も優秀なのだが、ここぞと言うときにヘマをする癖が付いており、彼女のサーヴァントは、これのせいでかなりの苦労をしている。

「ん、どうして遠坂？」

「士郎にお客さんよ」

「はぁ、またか」

そんなことを言いながら、盛大にため息をつく士郎。それもそのはずだ。ここ、衛宮邸は千客万来で有名な場所。故に、一日に二十人以上の来客も珍しくなく、今日はなんと三十五人目。記録更新であ

る。

「で、誰だった？」

「それが……」

士郎が来客について聞くと、凛は少し言いにくいような表情をする。そんな表情をする凛に首を傾げながら、彼は漸く焼き上がったホットケーキを皿へ移す。そして、凛に「テーブルに運んでおいて」とだけ伝えると、エプロンを脱いでラックに掛けてから、玄関のほうへ向かう。

玄関まできた士郎。そこには既に、来客の対応をしていたと思われる、桜のサーヴァントであるライダーが、なぜか主装備である投擲（スローイング）槍（ランス）を構えていた。

「ちょ、ライダー！　何やってんだ！？」

「しかし、シロウ。彼は……」

ライダーが指摘した来客を、士郎は見た。可愛らしいロゴの入ったTシャツと七分のジーパンというシンプルなスタイル。外見から見る年齢は、小学校中学年くらいだろうか。髪の色は金色、赤い瞳であることから、外国の人だということがうかがえる。ここまでだけなら、彼等にとっては赤の他人だっただろう。しかし、

「久しぶりだな、雑種。あの時、残骸に食い殺されたのかと思ったのだが、存外にしぶといようだな」

年齢の割に、似合わな過ぎるくらい、低く威圧的な声質。相手を見下すような、しかし、それが似合ってしまう強気な言葉。そして、耳に揺れる金色のピアスと、暴走するように溢れ出る膨大な魔力。

その時、士郎は直感した。なぜ、こいつがいる？そんな疑問を浮かべながらも、いつでも襲ってこられても良いように、両手に魔力を集中させようとするが……

「まぁ待て。我（オレ）とて、今回に限っては戦いに来た訳でも、宣戦布告に来た訳でも無い。ただ、我（オレ）のマスターに頼まれてきたのだ」

「お前が頼まれた？　ますます信用できないな、ギルガメッシュ？」

『ギルガメッシュ』。そう呼ばれた少年は、何やら不適な笑みを一つ浮かべて瞳を閉じる。そして、ゆっくりと瞳を開けると彼の周りを真っ赤な魔力の奔流が巻き上がる。

そして、その魔力が収まってからそこにいたのは、白いTシャツに黒いジャケット、同色のスラックスを纏い、髪色も瞳の色もまるっきり同じ青年が、そこにいた。

しかし、それが正しいのである。これが、『最古の英雄王』、無限の財を所有する英雄、ギルガメッシュの本来の姿――――服装は外出用に変えてあるが――――なのである。

「……仕方ない。靴を脱いで居間まで上がれよ。用件はそれからだ」

「物分かりがよくて助かるな」

士郎はそう伝えてから、居間に来るように道を開ける。

所変わって、同じく衛宮邸の居間。正確には応接間である。だが、今はそんなこと関係ない。

なぜなら、今、その場所は一種の戦場――――あくまで、空気だけであるが――――と化しているからだ。

「何の用だ、アーチャー……！」

ギルガメッシュの事を『アーチャー』と呼ぶ金髪の少女は、士郎のサーヴァントで『最優の英霊』とも名高いセイバー――――本名をいえば、アルトリア・ペンドラゴンである――――。彼女は、ギルガメッシュに対するかなりの警戒心を持ち、右手に持つ『風王結界（インビジブルエア）』を

展開した剣を突き付ける。

「何だセイバー、呼んだか……っ、お前は！」

居間の向こうから、茶色のお盆を持ってゆっくりと歩いてきた青年。褐色の肌色に白髪。黒のTシャツに黒いズボンといういで立ちの彼は、居間に座り込むギルガメッシュを見て、怒りと驚きを混ぜ合わせたような表情をしてからその場に固まる。

彼はアーチャー。第五次聖杯戦争の時に呼び出され、その半年後の事件で再び呼び出された、遠坂凛のサーヴァントである。

「なぜ貴様がここにいる！　貴様はあの時死んだのではなかったのか！？」

お盆をテーブルに置いてから、素早く何も言わずして投影、両手に干将莫耶を握ると、干将を彼の喉元に突き付ける。

士郎はそんな強引過ぎる『自分』を見て、「アーチャー！！」と怒気のこもった声で叫び、一歩踏み出す。だが、それを漸く起きた一人の女性に、右手で制止させられる。

「止めなさい、衛宮士郎。その必要はありません」

「ば、バゼット。今起きたのか、そのカッコ」

寝癖なのか、髪の横がチョンと撥ねた茶色の髪。紫色の瞳が士郎を横目で見つめ、彼の行動を制す。横に出した彼女の腕は、青いパジャマの上からでも分かるほど、鍛え上げられている。そして、彼女が纏う威圧感も、彼女特有の感覚だった。

「ほう、ここに居たか、逆月の主よ。言峰にやられた傷はまだ疼くか？」

「大丈夫です、ギルガメッシュ。しいて言えば、過去に貴方にやられた傷のほうが疼くほどです」

そんな感じに、いつの間にかバチバチと火花を静かに散らす二人。

そんな状況を見て、ただ苦笑いを浮かべるしか出来ない士郎達であった。

その後、ようやく落ち着いた二人を座らせ、何とか平穏を取り戻した衛宮邸。そんな中、ギルガメッシュが持っていた湯呑みをゆっくりとテーブルに置き、腕を組んで周囲を一瞥した。

「よし、では、我（オレ）がここに来た意味である、とある言伝について語ろうか」

そう言いながら、ギルガメッシュはなんと彼が持つ宝具『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』を展開。そこから一つの書状を取り出して、テーブルの上に置く。

しかし、今の行動を見て、士郎達は驚いていた。

（おいおい、そんなところから……）

（手紙出せるの？　というか……）

（王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）って、そんなこと出来たのか？）

上から、士郎、凛、アーチャーが各々に思ったことを心の中で呟く。しかし、そんなことにせずに、ギルガメッシュは書状を広げ、ゆっくりと読み上げる。

そのちょうど同じ頃。

聖祥大付属中学校、屋上。

「……なに？」

そこでは、一人の少年が右手にケータイ、左手にカレーパンという状態で、誰かと電話をしていた。

「つまり、ここには三枚しかカードがない、と？」

『あぁ。シエルとギルガメッシュからの伝言だと、そういうことになるようだ』

少年――ネオは、持っていたカレーパンを平らげると、着ていた制服のポケットからカロリーメイト（チーズ）を取り出し、片手で器用に開ける。今は昼休みで、なのは達に昼食の同席を誘われたが、直後にケータイのバイブ音がなり、何も言わずに屋上に跳んでいったのだ。

それよりも、何故、ネオが聖祥大付属中にいるのか？　それは、元々あった音峰からの指示で、そっちの学校に編入していれば、周囲の情報を得られやすいだろう、という音峰の考えからである。

「で、何のカードがあるんだ？」

彼はカロリーメイトをかじりながら、電話の相手である音峰に質問する。

聖祥大付属中の真っ白い制服を纏った少年、ネオは、意外な真実を耳にして、共学の表情になってから左手に持ったカレーパンを危うく落としそうになった。普段はそういうことを聞いても、表情一つ変わることないくらい、ポーカーフェイスな彼だが、その彼が驚くくらい、その事実は衝撃的だったのだ。

（何故だ。通常、クラスカードは同じ地に七枚現れるはずだ。なのに、場所がずれる、だと？）

そう、本来クラスカードは、それぞれの『出現地点』と『タイミング』はずれるものの、その地域は変わらない。それは、今までの聖杯戦争と同じである。しかし、今回のそれは、その常識を真反対に覆してきた。

「じゃあ、その三枚のうち、一枚がセイバーだとしたら、残りの二ま……」

そう言ってから、不意にケータイの電源が落ちた。何があったか全く掴めない彼は、ケータイをポケットにしまってから、周囲を見渡す。

そこは、妙な空間に包まれていた。
空は妙に暗い桃色に変色しており、至る所で陽炎が揺らいでいる。
まさにそれは、
「異空間、ってかんじだな」
そう言いながら、彼は両手に魔力を集め、剣を投影する。投影するのはもちろん、一番使い慣れている干将と莫耶だ。
そして、その二刀を両手に握ったまま金網のところまで駆け出し、そこから下を見下ろす。
「あいつが……原因か」
そこ———校庭の真ん中に、この空間の原因はあった。
それは、黒い魔力の塊。上から見ているため、正確な形は分からないが、あれが人型をしているのは間違いない。そして、その周りから無限に湧き出る泉のように、黒い魔力が噴き出し、それらが生き物のようにうごめいているのも、正確な情報だ。
「接近するのは危険か、だけど……」
あれのなかに、カードが一枚ある。そう直感で感じ取ったネオは、投影した二刀を消し、魔力に還元してから、今度は少し多めに魔力を使い、弓を投影する。
———投影（トレース）、開始（オン）

――――変換（チェンジ）、開始（スタート）

そして、同時に一本の『槍』を投影。続けざまにその剣を矢へと姿を変えさせ、弓につがえる。

ギリギリと音をたてて、弦がゆっくりと引かれる。それに合わせて魔力を矢に流し込み、照準を『黒いナニカ』に合わせる。

それに反応したのか、校庭にある黒塊の魔力が上へ立ち上った。それから発せられる殺意が、彼に直接ぶつけられるが、ネオはそれを押し返す如き殺意を以て、黒塊を睨み付ける。

同時に、塊も動き出した。魔力の霧を幾条もの触手のようにして、その鋭い先端をネオへ向ける。それを見たネオは、少しだけ口の端を歪め、そして不敵な笑みを浮かべる。

「残念ながら、これでチェックメイトだ」

そして、その矢は放たれる。それと同時に、塊も矛先を一気に伸ばし、矢を叩き落とそうと突き伸ばす。しかし、その矢は止まらない。いくら触手を伸ばし、振り下ろし、振り払っても、放たれた矢は何かのオーラを纏っているかのように、触手を突っぱねていく。

それもその筈である。そのような呪いを、そのような伝説を、今放った矢（やり）は備わっているのだから。

（絶対必中（グングニル）の神槍。北欧の神の持つ『絶対必中』の魔槍。これなら、絶対に当たる！　外れる訳ない！）

彼の思惑通り、その矢はまっすぐ飛んでいき、黒い塊に直撃する。同時に『壊れた幻想（ブロークン ファンタズム）』を発動していたため、巨大な爆発音と共に着弾、校庭の中心に土煙を巻き上げさせる。

（決まった。これなら、絶対に終わって……）

―　轟！　―

「いっ？！」

唐突に放たれた殺気。それに圧されたのか、わずかに後退って両手に干将と莫耶を投影。防御重視の姿勢で剣を構え、いつ撃ち込まれても良いように備える。

そして、殺気が幾分か引いてきたので、思い切って屋上のコンクリートの床を蹴り、跳び上がってフェンスを越え、いっきに降下する。

まさに、その瞬間だった。大人しくなっていた黒い塊が、いっきにその矛先を向け、襲い掛かってきたのだ。

「ったく、油断大敵ってことかよ！」

そんなことを愚痴りながら、ネオは両手に持った干将と莫耶を上空へ投擲、引いた右拳に魔力を集中させ、その一撃の射線をしっかと見据える。そして……

「っだぁ！」

渾身の力を使い、塊に向かって魔力砲を放つ。蛍光ブルーに輝く魔力砲『レイ・ブレイザー』は、向かって来る鋭い魔力の触手を消滅

させていきながら、その黒塊の中心に向かって突き進む。

しかし、それは塊が幾重にも重ねた触手を盾のようにして、簡単に防がれる。しかし、それを見てネオは不適な笑みを浮かべ、両手を横に広げて……

「今度こそ、チェックメイトだ」

その塊は、背後から回転して滑空して来る二振りの剣によって、十時に切断された。

そう。今飛んできた二振りの剣は、砲撃を撃つ前に投擲した干将と莫耶。その特製を活かした投擲方法で、ブーメランのようにして背後から切り掛かったのだ。

つまり、初撃に放った砲撃は『陽動』。本命は、あくまでも剣のほう。これが彼の戦闘形式（バトルスタイル）。高威力高リスクの技を囮に、小威力低リスクの技で仕留める、二撃必殺の連続技だ。

ネオは戻ってきた二本の剣を両手に一本ずつキャッチすると、再び彼が一番得意な構え――――防御重視の構えをとり、塊を睨む。

しかし、それでも塊を揺らいでいた。四つに分断されても、どうやら魔力が消失しなければそこに居続けるようである。全く、厄介なものである。

無限の残骸（アンリミテッドレイズ・デッド）でもない、黒い魔力の塊。あまりにも不気味過ぎるソレは、再び四肢を槍のように伸ばし、ネオへと迫った。

そして、迎撃体勢をネオが取り、キッと睨んでから剣を振り上げる。

「シュートっ！」

「ファイアっ！」

しかし、それは杞憂に終わった。なんと、上空から何発もの桃色の魔力弾と、金色の魔力弾が降り注ぎ、それらを撃ち抜き、一時的に退けたのだ。

ネオが上を見上げると、そこにはバリアジャケットを纏ったなのは達がゆっくりと降下してきた。

「ネオ！　大事ないか？」

昇降口からは、黒いバリアジャケットを纏ったハセオも飛び出してくる。彼がネオの隣に来ると、自身の背中に手を回し、光りを伴って無骨な形の双剣『回式（かいしき）・芥骨（あくたぼね）』を取り出し構える。

「ネオ、あれは？」

「悪性の魔力の塊だろう。多分、あの中央にカードがある」

「じゃあ、あれを倒せば良いんだね？」

「そういうことだ」

そう飯ながら、ネオは二刀を消失させ、突撃の体勢をとる。それに合わせるかのように、フェイトとなのはとはやても、各々にデバイスを構える。

（八神、聞こえるか？）

（ばっちしやで、ネオく……って、何で念話使えるようになっとんの？）

（昨日、ちゃっかりできた。そんなことより、一つの策があるんだ）

（ほんまか？）

（あぁ。俺の言うとおりに動けるか？）

（もちろんや）

（……頼もしいな。それじゃ）

彼は念話で、合図を入れてから、とだけ言うと、ハセオを連れてダッシュ。魔力の塊に突進して行った。

「おい、策はあるのかよ？」

隣を走るハセオの問いに対して、ネオは正面を見据えたまま、首を小さく横に振る。

首を横に振ったネオに、少しだけ怒気を含んだ声で吠えかけたハセオだが、ネオの「だがな」と言う言葉でそれを区切った。

「あるといえばある。だが、それが効くかはわからない、ってことだ」

そう言ったのを境に、二人は左右に———ネオは右に、ハセオは左

に飛びのく。飛びのいた後には、槍のように伸ばされた触手の矛先が、地面をまるでヨーグルトか何かのように、簡単に刈っていた。

「まずは俺達で撹乱しないと、始まらないからなっ！」

飛びのいてから瞬時に両手に魔力を集中、人差し指を立てる形で二丁拳銃のように構え、指の先を塊に向ける。そして……

「飛び道具は趣味じゃ無いんだがなっ！」

集めた魔力を、黒い魔力弾丸のように、まるで連射出来るように改良した二丁拳銃よろしく連発していた。それらは全て塊に命中し、その姿を霧散させていく。

――この技を、彼は『エーレガンド・セレブリティ？』と呼ぶ。もとはルヴィアゼリッタ＝エーデルフェルトの使うガンド撃ちの技術である。言ってしまえば、単純な『ガンド連続射撃』。しかし、それだけで終わらせないのが、ネオであり、名前に『？』の名がある所以。

「――Ａｎｆａｎｇ」

ネオの周囲に、色とりどりの光が浮かび上がる。突撃体勢を取るかのように両手を広げ、正面にいる塊に視線を移す。その周りには、すでにハセオが塊の注意を誘うべく走り回りながら『回式・芥骨』での連続攻撃に徹していた。

「これ、高いんだから、外れんじゃねぇぞ……」

彼の周りに浮かんでいるのは、ルビーを始め、サファイア、エメラ

ルド、ペリドット、クリスタルからダイヤモンドまでに至る、いろいろな宝石の数々。その一つ一つに莫大な量の魔力が蓄えられており、その光が、先の色とりどりの光。そしてこれが、一つ前の『エーレガンド・セレブリティ？』からの派生技。その名も……

「カッティング――――セブンカラーズっっ！！」

その名前と共に、その光は放たれた。それは、宝石の中で魔力を流転させ、本来保存できないはずの魔力をストック、宝石に宿った念に乗せてそのまま魔力を開放することにより魔弾として戦闘に転用する『宝石魔術』。今放たれたのは、全ての宝石に『破壊・消滅』の念を一瞬だけ混ぜ合わせたモノ。それを、直射放散型の砲撃として発射したのだ。

発射されたそれを見て、ハセオは両脚にグッと力を入れ、その場から離脱する。それを追おうとして、塊が一歩踏み出した瞬間……

―　轟！！　―

その塊は、七色の魔力の光条に飲み込まれた。飲み込まれてから爆発し、校庭の中心で土煙が立ち上る。

「やったか？」

「いや、まだだ。八神！」

まだ終わっていない。その直感通り、土煙の奥では黒い影が揺らいでいる。だから、彼は上空に待機してもらっていたはやてに合図を送る。

「――――銀月の槍となりて、撃ち貫け！」

配置された、七ツの白銀の魔力砲弾。既に臨界点に達しているのか、その丸い形が揺らいでいる。

「――――石化の槍」

その声と同時に、更に七ツの光球がその輝きを増す。それはまるで、空に浮かんだ七ツの水晶。チャージ臨界点をゆうに越えているのか、先程までゆっくり揺らいでいたものが、今となっては激しく揺らいでいる。

「――――ミストルティン！」

その言葉がトリガーとなり、七ツの光の光球は一気に放たれる。向かう場所は、もちろん塊へまっすぐに。

――――――――っ！

初めて聞いた、塊の声。ミストルティンの直撃を受け、着弾点から徐々に石化していく。しかし、まだ抗える力があるのか、その場でジタバタしたりしている。

しかし、そうさせては次の手に移れない。そう分かっているネオは、再び塊へ向かって走り出す。既に右手にはいくつかの宝石が握られており、その輝きを指の間から放っていた。

「少しだけ、黙っとけ！」

走っている加速を利用し、斜め上に一気に飛び上がる。眼下にはミ

ストルティンを受け、今なお攻勢に出ようとしている塊が、その鋭い矛先をネオに向け、突き放った。

しかし、それらは殆どが当たらない。もともと石化中であり、動きが鈍くなっている状態で放たれた矛なら、例え空中で移動が出来ないネオであっても、回避はかなり楽になる。それでも、避けきれなかったモノは確実にネオの体を穿つ。そのたびに彼は苦悶の表情を浮かばせるが、今はそんなこと気にしてられない。

今はただ、次の一撃に繋がる布石を――――！

「『世界蛇（ヨルムンガンド）の口』！」

それは、ルヴィアの使う魔術の一つ。ミズガルズの大蛇の名前を冠するその魔術は、まさにその名の通り巨大な魔法陣で塊を捕縛し、ミストルティンと共にその動きを完全に固定した。

そして、彼は着地と同時に後ろを振り向き、そこにスタンバイしている二人の魔導師へと叫ぶ。

「高町、ハラオウン！　砲撃チャージ、三十秒！」

その声とほぼ同時に、後ろで二つの色が輝き出す。一つは桃色、もう一つは金色。まさにイルミネーションの様に美しく輝いている。

それを見計らって、ハセオとはやては先に離脱。ネオも少し後ろに下がって、砲撃の余波を浴びないところまで動くと、最後の布石を打つため、一本の短剣と八つの宝石を取り出す。

「Ｖｏｍ　Ｅｒｓｔｅｎ　ｚｕｍ　ａｃｂｔｅｎ　（１番から８番）

。Ｅｉｎｅ　Ｆｏｌｇｅｓｃｂａｌｔｕｎｇ（直列起動）――」

瞬間、浮かび上がる八つの魔法陣。それが真っすぐに列をなし、二つの砲台が形成される。

「『打ち砕く雷神の指（トール　ハンマー）』！」

作り出されたのは、八つの魔法陣による『魔力の回転増幅炉』。それが、なのはとフェイトの正面へ動き、さらに大きくなる。

「言っておくぞ、八神、ハセオ。今の彼女達の前には……」

――出ないほうが良い。

放たれた金と桃色の砲撃。通常なら、人一人を飲み込める大きさの口径である『エクセリオン・バスター』と、同じく三点砲火の『トライデント・スマッシャー』だが、今回は『打ち砕く雷神の指（トール　ハンマー）』の恩恵を受け、その大きさが倍加しており……

―　轟！　―

その塊を、いとも簡単に飲み込んだ。

「やった、かな？」

［結果はどうあれ、確実にダメージは通っています。捕縛も簡単でしょう］

煙をあげている着弾点を見ながら、なのははゆっくりと愛機（デバイス）の杖先を下ろす。それにならって、フェイトも愛機（デバイス）を下ろす。

そんな中、彼だけが異変を察知していた。

（……？　何だ、この、ザワザワする感覚は……？）

そう、ハセオである。愛機である『スケィス』から発せられる、彼にしか聞こえない警戒音。故に、彼はまだ芥骨を下ろせずにいた。

「なぁ、ネオ、何か感じな――――」

彼がネオにそう言いかけたとき、彼の目は青く輝いていた。右手には、あの時戦った時と同じ、赤黒い刀身を持つ刀を逆手に持ち、眼鏡は外している。

「――――やっと本体のお出ましか」

小さく呟いたかと思うと、グッと腰に力をため、地面が弾けたかと思うと既に煙のほうへ向かっていた。

そして、その煙の上に飛び上がり、赤黒い刀――――白龍の切っ先を下に向け、一気に降下していく――――が

―　シュン　―

「――――がっ！」

その前に、鎖付きの小槍が伸び、彼の体を貫いた。

七話：冬木の情勢、海鳴の異変（後書き）

感想、意見など、お待ちしています。

あと、ネオとアーチャーが投影する、オリジナル宝具を募集します。
まだ敵キャラも募集しているので、奮ってご応募ください！

次回予告

「この小槍、ライダー、か？」

「ネオ君！！」

「な、こいつ、速い！」

「ふっざけんなよ！」

「騎兵（ベルレフォーン）の手綱！」

「来いよ、来い……！」

次回

八話：俺は、此処にいる

「スケェェェェィスッッ！！」

八話：俺は、此処にいる（前書き）

どうも、やっと八話です。

今回、試験的に地の文と会話文の間を二行分にしてみました。元の一行のほうが良いなどの意見が合ったら、お願いします。

では、どうぞ！

八話：俺は、此処にいる

全部がスローモーションになったようだった。目の前にいる『あれ』も、一瞬で距離を詰めてアイツの左脇腹に突き刺さった銀色の小槍の軌跡も、全部がスローモーションみたいだった。

だけど、そのあとに続いたドサッという音で、俺は何とか現実の世界に帰ってこれた。

目の前にいるのは、膝を地面に付いて、じりじりと引っ張られていくネオ。アイツの先にいるのは、長い髪も体も真っ黒な女性。だが、影のようなソイツは、女とは思えない腕力と引き力でアイツを引っ張っていく。

「ネオ君！」

それを見た高町教導官は、再び地面を蹴って空に飛び上がり、愛機であるレイジングハートを構える。そして……

「ディバイィィィィン、バスターッッ！！」

放たれたのは桃色の砲撃。彼女の十八番である、直射型の砲撃『ディバイン・バスター』だ。カートリッジの装填（ロード）はしていないみたいだけど、その威力は顕在。真っすぐに黒い女へ飛んでいく。

それに気がついた女は、ネオに刺さっていた槍を引き抜いて回収すると、一気に跳び上がって砲撃を回避する。

すると、今度は一直線に俺の方へ突進してきた。

それを見た俺は、両手に持った芥骨を構え、迎撃の体勢を取った。

何があったか、彼は瞬間判断が出来なかった。本体の存在を、強化した『目』で確認したから、腰に差していた白龍を引き抜き、逆手に持って構えてから縮地で移動、真上に上がってから斬り掛かったのは覚えている。しかし、そこからの記憶が曖昧なのだ。しかも、左の脇腹が何となく温かい。

何とか動く右手でその何となく温かい場所を触れる。すると――――

「――――――っ！」

瞬間、激痛が体中を駆け巡った。触れた右手を見ると、指の先が真っ赤に染まっていた。漸くここで、彼は先ほど投げつけられた槍で左脇腹を貫かれたことを思い出した。

（くっ、あいつ。流石はライダーってところか。こっちの攻勢を見るや否や、先に動いて叩き潰しに来る。でも、だったら――――！）

そんなことを考えながら、彼はゆっくりと立ち上がる。動く度に貫かれた場所から激痛が走るが、今はそんなこと構っていられる時ではない。目の前で防壁を展開しているはやてに気づかれないように立ち上がると、メガネをかけてから残った魔力を使って弓を投影。続けて剣を投影し、矢に変換してから弓につがえて構える。

「……ちょ、何しとるん！？　今は休まなあかんよ！？」

「……ない」

「え？」

はやてが聞き直した瞬間、彼の目の色が変化した。表情が変わったと言っても良いかもしれない。それは、先ほどまで倒れていた敗者の表情ではなく、明らかに再び立ち向かう挑戦者の表情。ギリギリと弦の鳴る音とともに、矢に真っ青な光が灯りだす。そして……

「まだ、負けてない！」

瞬間放たれる蒼の矢。それは宇宙をかける流れ星か、はたまた彗星如く光を伴って、黒いライダーの頭部目掛けて飛んで行き……

―　戟！　―

そんな高い金属音を残して、ライダーの手に持った槍で簡単に弾き飛ばされた。

それもそのはず。魔力を込めたとしても、満身創痍の彼の状態で込められる魔力量など、たかが知れている。少なすぎるのだ。今の彼の状態と、魔力量からみて、込められる魔力量が。

そして放った本人は、その時の反動のせいで地面に膝を付いてしまう。右手には、何とか抜いた白龍が握られているが、このあと、黒ライダーが接近してきて応戦できる余力は……

「ない、か」

そして、彼は斜め上に吹き飛ばされた。いや、この場合、蹴り飛ばされたと言えば良いか。高速で接近してきた黒ライダーが、柔らかい体を利用して一瞬でネオの懐に潜り込み、彼を上に蹴り飛ばしたのだ。

空中に飛ばされ、いっきに無防備になるネオ。それを狙って黒ライダーが地面を蹴り、ネオへ迫る。そして、黒ライダーが槍を振りかぶる。やらせはしないとハセオが地面を蹴って飛び上がるが、もう間に合わない。

ネオの左胸目掛けて、思い切り槍が振り下ろされ――――

「でえぇぇぇりゃぁぁぁぁッッ！」

なかった。急に二人の間に割り込んできた青い影が、黒ライダーを蹴っ飛ばして地上に戻し、ネオを担ぐとそのまま素早く地上に戻る。

「ったく、手間かけさせんじゃねぇよ。それでも赤枝の騎士を受け継いだものかよタァコ」

ネオを地面に寝かせながら、割り込んできた青い影はそう言った。青いピチッとした軽いボディアーマーに、右肩に付いた肩当て。スラッとした長身に似合う、青い髪と赤い瞳。そして、異常な魔力を放つ、血のように真っ赤な槍。まさに、武人という風格を纏っている青年だった。

「その辺りで止めときなさい、ランサー。そこまで喋れるほど、ここからは余裕がありませんよ」

そんなふうに話すランサーを、一人の女性が制した。赤っぽい茶色の髪にブラウンの男性もののスーツ。ネオと同じデザインのグローブとブーツ。彼女もまた、彼と同じくらいの風格を纏っていた。

「わぁーってるさ、バゼット。んじゃまぁ、いきますかねぇっ！」

ランサーがそう言うと、真っ赤な槍———ゲイ・ボルグを構え、突撃していく。

そして、瞬時に且つ強引に自分の射程範囲に突入すると、構えた槍を高速で突き出す！

「おらおらおらおらおらおらおらおらおらぁぁっっ！！」

―　戟戟戟戟戟戟戟っっ！　―

まさにそれは、機関銃の如き速さ。黒ライダーも持ち前の速度でそれを回避し、手持ちの小槍でいなしていくが、それでも捌ききれないのか、何発か体を掠め、そのたびに赤い血が滲み出る。しかし、そんなランサーの攻勢も、一瞬だけ止まるところ―――槍を突いて、引き戻すときのタイムラグを、黒ライダーは逃さない。左手に持っている小槍で突いてきた槍を払うと、右手で持っている小槍で、ランサーの左胸目掛けて突き出す―――

「―――出直して来な、馬鹿が！」

しかし、槍を引き戻さず、そのまま横に払う。すると、槍の穂先の少し下辺りの軌道上に、黒ライダーの体があるわけで、そのまま殴り付けられる形で槍に巻き込まれ、上に放り投げられる。

「今だバゼット！　一発かましてやれ！！」

黒ライダーを投げた方向――――つまり空中には、右手をルーン解放で青く染め、右腕を大きく引いた形で構えるバゼットの姿がある。

この構えは、バゼットオリジナルの必殺技。単純だが、一番重量と威力が拳に乗る一撃。名前こそ無いが、単純な打ち下ろし。それでこそ――――！！

「はぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

―　打！　爆！！　―

驚異的な威力を発揮する！

黒ライダーに吸い込まれるように放たれた打ち下ろしの一撃は、しっかりと直撃し、眼下の地上にたたき付け、土煙を立ち上げる。空中から戻ったバゼットは、一度拳をきゅっと握り直してから構え、ランサーも彼女の前で槍を構え直す。

「少し甘かった。直撃（ヒット）のコンマ五秒前でガードに入られました」

「それでも、ダメージは通ってんだ。このまま押し通すぞ、マスター！」

ランサーとバゼットは、互いに檄を飛ばし合い、土煙から飛び出してくるであろう黒ライダーを待ち構え……

「ヒヒィィィィンッッ！」

強烈ないななきと白色の光を伴って、それは現れた。

しかも、二つ。

姿形が全く変わらない、二人の黒ライダーと、彼女らが呼び出した二頭の天馬。それらが、別々の方向――――片方はネオを介抱しているなのは達のほう、もう片方は、もちろんバゼット達のほうを向いていた。

そして、何も言わずにその二組は、それぞれ向いている方向に向かって突進していく。それもかなりの速度で。

「普通のサーヴァントじゃあねぇか。はっ、上等じゃねぇか！　バゼット！！」

「もちろんです、ランサー！」

それを迎え撃つべく、バゼット組は動き出す。そして、彼女達が動き出すと同時に、なのは達のほうも動き出した。

「こっちに来やがった！」

先ほど怪我をしたネオを介抱しているなのは達に背中を向けながら、ハセオは自らの得物である双剣『回式・芥骨』を構え、迎撃の形をとった。

「ハセオ君。こっちはネオ君のほうで手一杯だから、相手、お願いね」

「任されました、高町教導官！」

そうハセオが言うと、足の裏に魔力を集中させ、突進してくる黒ライダーに視線を合わせる。そして、

―　爆！　―

溜めた魔力を一気に爆発させる。すると彼は、まるでロケットかミサイルのように黒ライダーへ突撃する。

ハセオは、陸戦特化型の魔導師だ。そのため、廃ビルや陸上での三次元的な攻撃を行うため、空中に飛び上がることがある。それが、今の魔力の爆発で一時的に飛び上がる技能だ。一見、簡単そうに見える技術だが、これが意外と難しいのだ。足に魔力を溜めること自体は、身体強化の応用で何とかなるものである。しかし、その溜めたものを爆発させて加速させるとなると、爆発させる為の余計な魔力も使ってしまいがちになる。しかし、ハセオはそれをデバイスの

補助も無しに、一発でこなしてしまう。空戦適性のある彼が、わざわざ陸戦を選んだのには、この魔力運用能力を含めた『とある』訳があるのだが、ここでは割愛させていただく。

「だぁぁぁっ！！」

ハセオは、黒ライダーの乗った突撃してくる天馬に合わせて、双剣を振るう。

―　撃！　―

灰色っぽいハセオの魔力と、天馬の白い波動がぶつかり合い、斥力場を生む。しかし、ハセオはそれを見越していたのか……

「ま、だ、だぁぁぁぁぁっっ！」

天馬とぶつかっている、右の双剣の柄に付いているトリガーを、ここぞとばかりに引いた。すると……

―　キィィィィンッッッ！！　―

耳障りな金属音を発しながら、刃の先が震える。まるで、その震え方はチェーンソーのよう。ゆっくりと、だが確実に天馬が放つ波動を削り取っていく！

「――――――――っ！？」

ぶつかっている状態。その異変に気がついた黒ライダーは、天馬に付いている手綱を引いて拮抗状態から脱し、少し上空に上がって滞空（ホバリング）する。対するハセオは、地上に下りてから双剣をもう一度構え直す。

「ちぃっ、こんなに早くこれに気がつくとはな。でも――――」

そう言いながら、彼は芥骨を消して両手を掲げ、そこに巨大な魔力の塊を形成する。それは黒と青が美しく混ざり合った色をしており、それが炎のように揺らいでいる。

「これなら……」

その塊を右手に持ち直すと、再び魔力を足に送り、爆発。跳躍と共に加速し、一気に黒ライダーに接近する。

そして、少しライダーより上空まで上がると、そこから一気に魔力塊を叩き付ける。しかし、それはいとも簡単にガードされ、槍で上に逸らされる。

「――――――ゃ」

しかし、それを見たハセオはライダーの見えない『死角となっている真上』で小さくガッツポーズをする。

ライダーは、弾いた瞬間、体勢を崩しているハセオに追撃をかけようと天馬を走らせ槍を振りかぶる。

しかし、そこに彼はいない。まさか、という疑問を抱いたライダーは、その疑問がハズレであるという一つの希望を胸に、真上を見上げる。

そこには――

「せぇりゃぁぁぁぁぁ！！」

先程の双剣とは打って変わって、紫色の刃を持つ、身の丈以上の大きさの鎌を上段に構えて落下してくるハセオがいた。

足裏の魔力爆発と落下速度、これが相乗効果を起こして、ハセオが接近してくる速度はかなりのもの。

そして、ライダーもそれには反応できない。結果――

―　斬！　―

全く反応できず、ライダーは真っ二つに斬り裂かれ、ゆっくりと降下していった。

ちょうどその頃、もう一方のほうでも決着が付きそうになっていた。

―　疾っ！　―

「くっ、あいつ、一段と速く……！」

移動速度と突進速度がさらに速くなったライダーに、ランサーは防戦一方になっていた。

しかし、その後方で――――

「後（アン）より出でて先（サラー）に断つもの――――」

たった一つの詠唱を終え、僅かに後ろに引いた右拳の上に、青い球体を浮遊させてライダーをキッと睨むバゼットがいる。

（よくやりましたランサー、私の合図で離脱を）

（承知！）

耳に付けたインカムからの指令を受けたランサーは、再三突進してくるライダーを一度だけ受け止め、また空高く放り投げる。

そして、ライダーの目に映るのは、ただ突っ立っているだけの、無防備な状態のバゼット。たった一度だけかもしれないチャンスを、逃すほどライダーも馬鹿ではない。

両手に持った鎖槍を、天馬の口の近くに持っていく。すると、まばゆい光を放って鎖槍が光の手綱となり、天馬に繋がれる。その瞬間、天馬を覆う光がよりいっそう強く輝く。

（天馬の力が倍加。ということは……来る！）

バゼットは、それを見て、右足を後ろに引いてぐっと腰に力を入れる。

天馬は、ライダー本人に手綱を引かれ、ゆっくりと上体を起こし――

「騎英（ベルレ）の――――――手綱（フォーン）！！」

正しく光の弾丸。そんな速度で、ライダーは彼女へ迫る。しかし、この時を、彼女は待っていた！

硬化のルーンを組んだ手袋も――――

限界とも言える域まで鍛え上げ、練り上げた格闘術も――――
どんな攻撃にも耐え抜く、強固な肉体も――――
それらすべて、ただ敵を屠るためのものではなく――――
ただ、この一撃へ――――

「斬り抉(フラガ)る――――」

繋ぐための――――

―　轟！　―

「戦神(ラック)の剣！！」

―　打！　―

そして、光は放たれる。その瞬間、すべてが停止していた。
流星のようなまばゆい光も、大地を抉(えぐ)った暴風も、天馬による突進の慣性力すらも、攻撃の事実そのものが、天馬の心臓を貫いて、消されていた！

―　打打！　―

その事に驚き、行動が停止したライダーを、彼女は逃さない。一瞬で懐に接近し、顔面にストレートパンチをお見舞いする。

喰らったライダーは、そのまま吹っ飛ばされ、地面に伏する。そこから立ち上がり、再び攻撃に転じようとするライダーだが、如何せん、遅すぎた。

「突き穿つ（ゲイ）……！」

声のするほうを見ると、そこには既に槍を大きく振りかぶり、殺気混じりの視線を飛ばすランサーがいて――――

「死翔（ボルグ）の槍！！」

叫びと同時に槍は放たれ――――

「――――――っっっ！！？」

声にならない叫びとともに、ライダーは貫かれて爆発した。

「ふぅ、終わりましたね」

「――――？　いや、まだだバゼット！　構えろ！」

瞬間、ライダーが爆発したところから黒い煙が立ち上り、ハセオ達のほうへ向かっていった。

鈍い音をたてながら衝撃から三人を守るなのはのプロテクション。しかし、それももう長く持たないのか、所々ヒビが入っている。

再び接近を試みるハセオだが、巨大な黒い影に吹き飛ばされ、コンクリの壁にたたき付けられる。

「くそ、これじゃ、教導官達が――――力が、足りない。力が、欲しい――――」

再び立ち上がり、そう呟いたハセオ。そして、一歩、また一歩と踏み出した瞬間――――

「――――はっ」

頭の中で、なにかが弾ける。

「――――来た」

彼の右手に目のような光の紋様が浮かぶ。それと同時に、左手にも同じ紋様が浮かび上がった。

「――――来た」

今度は頭に、目のような光の紋様が浮かぶ。そして、その薄いオレンジ色の光が、彼を包む。

「――――良いぜ。来いよ、来い。俺は――――」

彼を包む光がさらに強さを増す。それに気がついた影は、先に彼を潰すため、その矛先を伸ばした。しかし。

「此処にいる！！」

瞬間、その光は弾ける。

「スケェェェェェイス！！！！」

そして、彼の背中に、黒い巨大な人形が浮かび上がっていた。

八話：俺は、此処にいる（後書き）

感想、意見、質問などがあったら、よろしくお願いします。

あと、今回から番外編ということで、コラボを募集します。コラボしてみたい、という心の広い作者様がいらっしゃったら、感想、もしくはメッセージへお願いします。

次回予告

「これが、憑神（アバター）の力……！」

「君は、私の後ろにいて」

「ネオ、準備を！」

「行くぞ弟！――――四枝の浅瀬（アトゴウラ）！！」

「もう、誰も亡くしたくないから――――」

「プラズマランサー、ファランクスシフト……！」

「天の柱、魔術回路と同調。光翼剣、展開……！」

「なるほど、あれがＡＩＤ……」

「あんたは、誰だ……？」

次回

九話：私が守るから

「「クロスレンゲキ！！」」

番外編一：白亜と白き一角獣（前書き）

一ヶ月ほど空いてしまい、申し訳ありませんでした。

今回は、ラグナシア様の作品とのコラボ作品です。

では、どうぞ！

番外編一：白亜と白き一角獣

新暦００７１年

遠い遠い、管理外世界。

地平線まで続く荒野、照り付ける太陽。時折吹く、砂を運ぶ風。

そんな、生物が存在しないような世界に、彼は来ていた。

「くそ、ほんとにこんなところにあるのかよ」

［確かに反応はこの辺りから出ていますが……私を責めないで下さいよ？］

赤い目に短めの銀髪。旅に出た旅人のような服装をしている青年――御門錬（みかどれん）は、自身の持つデバイス『ブリューナク』に対して、ちょっとした文句を言った。

彼だって、本来来たくてこんな辺鄙な場所に来たわけではない。彼は、とあるロストロギアを追っている。それは管理局も追っているため、おおっぴらに捜索出来ず、だがひたすらに反応を追い掛け、次元転移を繰り返してようやくこの場所にたどり着いた訳だ。

「だけど、反応が薄すぎて、どこにあるか解ったもんじゃ――――ぁ？」

彼がそう呟きながら頭を掻いた時、彼の視界に一筋の赤い光が走った。それは何かにぶつかると、爆発して何かを霧散させた。

「相棒、あれって……！」

［反応、見つけました。しかし、無関係者が巻き込まれています］

「マジかよ！？　くそっ、世話焼かせんなよなぁ！？」

そう自暴自棄になりながら叫ぶと、彼は一気に反応があった場所まで飛んでいった。

それより少し前――――

「ここなのか？　正体不明の反応があったのって」

［そのようですが、何もありませんね］

白が強いセミショートの銀髪に、アメジストの様な灰紫色の瞳。まだ体が出来上がっていない、あどけなさが残っているものの、なに

か覚悟の決まっている表情の少年が、照り付ける太陽のせいでかいた汗を手の甲で拭いながら、左胸についている剣十字のバッジに向かって言った。

少年は、人差し指をあごに当て、その場で考え込むような仕草をすると、なにか閃いたのか、ハッと顔をあげ、自らの相棒――――剣十字のバッジになっているデバイス『ユニコルス』に声をかけた。

「ユニコルス、セットアップ。限定展開、腕の装甲だけね」

［？……イエス、マスター。セットアップ］

ユニコルスは、なにか疑問を持ちながらもマスターである少年の指示に従い、セットアップする。すると、彼の右肩から先が黒いインナースーツに包まれ、その上に機械的だが決してゴツくない、真珠のような綺麗な白をした装甲が現れる。

彼は右手を軽く開いたり閉じたりして感触を確かめると、右手を開いたまま真下の地面に当てて、

―　煌　―

魔力を地面に広く少し深めに流し込む。その魔力はうっすらと青く輝き、彼を中心に半径五十メートルの範囲にわたって輝く。そのまま動かなかった彼だが、突然、何かを見つけたかの様な表情を浮かべると、真っすぐ前を見据えた。

「……見つけた」

［えぇ。十二時の方向、距離二十五。魔力反応を確認しました］

五十メートルの範囲に真ん中辺り。そこに、反応があった。

黒い箱。どうやら、棺のようだ。真ん中にはケルト十字があしらわれており、なかなかに美しい部類に入るだろう。だが――――

「周りに、なんかウジャウジャいる時点でダメだよなぁ」

少年の言う通り、その棺の周りには黒い影のような存在が、無数に群がっていた。彼が確認しただけで、四足歩行、二足歩行、さらには飛行しているものの三種。

「数、多いな」

［ですが、完全な魔力物体です。ブラスターを一発、箱にぶちかませば周りも消えますよ？］

「それはダメだろ。何より、姉さんに無傷で回収を頼まれてんだ。傷つけるわけには――――」

そこまで言った瞬間、黒い影達がすべて、彼のほうを向いた。瞬間、なにか、視線のようなものを感じる。それは『殺気』。久しく感じ

ていなかったソレが、彼を押し潰さんばかりの圧力でのしかかる。

『ちょっとスウェン！　今どこにいるの！？』

突然、彼の横にモニターが現れ、同じ様な綺麗な銀髪の少女が映し出される。声には怒気が僅かに込められているが、それよりも彼を心配するほうが大きいように聞こえる。

スウェンと呼ばれた少年は、一度前髪をフッと持ち上げると、モニターに写る自分の姉に対して、優しい表情を送った。

「大丈夫、姉さん。怪我せずに、必ず戻るから」

それだけ言うと、まだ何か言おうとする彼女を無視してモニターを切り、通信をロックする。

通信をロックした彼――――スウェン＝リンクスは、降りていた前髪をかきあげると、ユニコルスを左胸から外し、空に掲げる。

「ユニコルス、フルセットアップ！！」

［オーライ、マスター。フルセットアップ！！］

その声と共に、彼はバリアジャケット――――彼は防護装甲と呼ん

でいる――――に瞬間的に換装する。胸部をおおう装甲の中央に青い水晶。頭に着いた兜は、どことなく一角獣を連想させる白い角。そのほかは、先程限定展開した腕と同じ、真珠のような白い装甲で覆われている。これが、ユニコルスの本来の姿だ。

「じゃ、まず手始めに……」

そう言いながら、彼は右腰にマウントされている一丁の長銃を手に取ると、軽くクルクルと回してから構えると、備え付けのカートリッジが装填され、高濃度の魔力が一気に収束する。

瞬間、箱の周りにいた黒い何かは一斉に彼の元に殺到する。これは好都合、箱に被害が出なくて済む。そう思いながらも、彼は銃口をずらさない。そして――――

「ブラスタ・カートリッジ、装填確認。魔力圧縮率、最大。ラプラス・バスター！」

［ファイア！］

放たれたその光は、赤に青い光でコーティングされた極太の砲撃。それが、黒い何かの先頭に直撃。爆発を以って霧散させる。

［まだ来ますよ］

「分かってる！」

そう言いながら、彼は背中のバックパックから一本の棒を引き抜き、トリガーを押す。すると、棒の先から純魔力の刀身が現れる。

それを確認すると、右腰に長銃を戻すと、バックパックのバーニア吹かせ、一気に突撃する。

その一連の流れを見ていた錬は、デバイスをセットアップするも動く気配はない。いや、動く気がなかった。

「おーおー、あいつ、やるな」

群がるシャドウをちぎっては投げちぎっては投げ――――もとい、接近してくれば魔力の剣で斬り、離れていても銃で撃ち抜く。まさに隙がない。

［識別は不明です。棺を特殊なバインドで固定していますし、多分管理局員かと］

「だよな。さて、どうすっかなぁ」

そんなことを言っているのもつかの間。少年がシャドウをすべて殲滅した。ここまでの時間は5分。早過ぎる。なかなかの腕前だ。

そろそろ出ようかと少しばかり腰を浮かせた瞬間――――

「なぁっ！？」

先程の砲撃と同じものが、錬に向かって真っすぐ飛んできた。錬はそれを、両腕に付いたガントレットをクロスさせて防ぎ、明後日の方向に弾き飛ばす。

「あんた、何者だ？」

いつの間にか錬の正面四メートルのところに少年が来ており、左手に持った魔力剣の切っ先を錬に向けたまま、直立不動で固まっていた。

「普通、名乗るなら自分からじゃないのか？　管理局の局員さん？」

「時空管理局、本局航空特務隊『ＦＡＩＴｈ』所属、スウェン＝リンクス二等空士だ」

少年――――スウェンがそう名乗ると、彼は魔力剣を背中のバックパ

ックに戻し、右手の銃を錬に向ける。名乗ったんだから、おまえも名乗れ、ということだろう。

「んー、そうだな……白亜のアーベントだ」

そう名乗ってから、錬は構える。どこから来られても良いように、自然体を残しつつ戦闘姿勢になった構えだ。それを見て、スウェンもまた、マグナムを構える。

（ふーん、こいつが巷を騒がせてる白亜のアーベントか。魔力量は高いほうだろうけど……）

スウェンが心の中でそう呟くと、一瞬でバックパックのスラスターを吹かせ、調子を確かめると、正面に相対する騎士を見据える。そして、右手のブラスターを構える。トリガーには指がわずかに掛かっており、いつでも放てる体勢だ。

二人の間を静寂が包み込む。吹きすさぶ風は乾ききっていて、二人から少し離れた所で、砂塵が舞った。そして……

「「……っっ！！」」

二人同時に動き出した。錬はスウェンに一撃を入れるべく、地面を蹴って肉薄する。対するスウェンは、同じく地面を蹴って勢いよく

後退し、ブラスターを構える。

しかし、引き金を引くよりも速く、スウェンの目の前にはガントレットで武装された白亜の騎士の拳が迫ってきている。

避けきれない。そう判断した彼は、思い切った行動に出る。

右手のブラスターを腰に戻し、そのまま流れるように右手を上に動かす。勢いで右腕に装着されていた一本のビームサーベルが伸展し、腕から伸びた『トンファー』として展開。先から魔力刃を発生させ、それで一撃を受けとめた。

「ほぅ、なかなか――――」

スウェンの装備『ビームトンファー』で一撃を受け止められた錬だが、表情に焦りはない。受け止めてくれているなら、その至近距離の状態を最大限に利用するまで。

錬は地面を強く踏み付ける事で――――震脚という、古武術の一種で――――地面の砂を一気に立ち上らせる。

「……っ！？（目眩まし！？　だけど、この程度……っ！）」

それを目眩ましと素早く判断したスウェンは、左手のビームトンファーも展開し、両手を広げてコマのように高速回転、砂煙を払い飛ばす。そして、右手のトンファーを収納して、素早くブラスターを

引き抜いて構える。だが……

「なっ！」

目の前に白亜の騎士はいない。周囲を見渡してから、何とか見つけた魔力反応を辿り、かなり離れた場所を見つめる。

スウェンから十メートル離れた場所。そこに、錬はいた。右手を空に向け、足元には少し大きめの魔法陣。彼の正面に形成される四つの角を持つ星型の紋章。そこに集まっていく膨大な魔力。それだけで、彼が次何をやって来るか、スウェンは素早く判断する。

（砲撃っ！？）

咄嗟に距離を取って防御に入ろうと試みるスウェンだが、もう既に遅かった。

「恒久なる彼方より現れ、闇を滅せよ！　ディバイン・ストリークッ！！」

放たれたのは、白銀に輝く高速砲。避けられないと一瞬で判断出来たほど、その威力は絶大だ。なんとかバックステップからのスラスター全力噴射で威力減衰を狙うスウェンだが、もう無理だ。

でも――――――

「まだだぁぁぁぁっっ！！」

瞬間、彼の蒼の魔力波が一瞬起こり、バックパックに青の機械翼が出現する。すると、どうだろう、機械翼の青い翼一つ一つ、合計八つの蒼翼がメインの翼からが分離し、それぞれ別々の軌道を描き出す。そして、隠し付けられた小型の砲門から圧縮魔力砲を放って、錬が放った砲撃を消滅――――相殺させた。

「なぁっ！？」

驚く錬を尻目に、スウェンは一気に飛び上がって左右のブラスターを構え直す。それと同時に、散開させていた蒼翼――――『機動兵装射砲撃翼　雷轟（らいごう）』の砲門も同時に錬へと向ける。すでに内部で圧縮魔力が充填されており、いつでも発射できるような態勢だ。

「（くそ、この体勢だとさっきのは撃てないし、撃てたとしてもただの博打にしかならない。だったら）相棒！！」

［了解です！］

瞬間、錬の装備がガントレットとアンクレットから長銃に変わる。まさに、スウェンの攻撃と相対する気満々で構え、魔力を収束する。

「ユニコルス、全射砲撃武装展開！　フルバーストモード！」

「ブリューナク、魔力フルチャージ！」

双方の砲門に魔力が集中する。片方は白銀、もう片方は蒼。互いに拮抗しあうその光は、不毛の地を照らす灯火のように輝いている。

そして――――――

「ラプラス・ブレイカーっっっ！！！」

「サウザンド・ブレイバーっっっっっ！！」

二つの光が交錯する。同時に放たれた光は、一瞬だけ交わると、すぐに爆発する。そしてその光は、二人がいるところを完全に包み込んだ。

光が収まると、錬は体を投げ出すような体勢になり、その場に仰向けに倒れ込んだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……何だったんだよ、あいつ」

満身創痍になりながら、錬は何とか転移の術式を起動させ、座標を地球にセット、転移した。

実際、疲れた、とか言っておきながら、心の中ではもう一回、あいつとやってみたいな、とか思っている錬だった。

番外編一：白亜と白き一角獣（後書き）

いかがでしたか？

感想、意見、質問、今回のようなコラボの依頼など、どしどし待っています！

では、また次回に！

九話：終わり、そして再び……（前書き）

すみません、予定していた内容とかなり変更してしまいましたが、何とかうまく繋がったので、投稿します。

これは、安易な次回予告はやらないほうが良いですね、きっと。

では、九話、長らくお待たせしましたが、どうぞ！

九話：終わり、そして再び……

次元航行艦『オルカ』ブリッジ。

そこは、今までにない慌ただしさを帯びていた。

「管理外世界９７、ポイントＸ２－３４－４より、高濃度魔力反応！」

「波形、形式不明（アンノウン）！」

「モニタ、電波障害で映像が来ません！」

「くっ、何が起きてるんだ」

艦長であるパルミナは、歯を食いしばりながら静かに言った。艦長である自分がここで声を荒げて、場を乱してはならない。そう思っているからだ。

パルミナは一度大きく深呼吸すると、目をしっかり見開いて、立ち上がって声を放つ。

「先ずは落ち着け。第一に管理対象へのモニタ回復が最優先！　その後に、館内の障害回復だ。各員、抜かるなよ！」

『了解！』

その声を聞いて安心したのか、パルミナは一息ついてから椅子に座り、パイプをくわえる。最近は、体への配慮を最優先に考えハッカパイプに変えてあるが。

「モニタ回復！　映像、来ます！」

くわえた瞬間、主モニタが回復し、映像を映し出す。そこには……

「――憑神（アバター）。ハセオ、おまえも碑文使いだったかのか」

そう静かに言うパルミナの顔には、懐かしくも憎い、そんな表情が浮かんでいた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああっっ！！」

ハセオが叫ぶ。すると、それに呼応するようかのように彼の背中から現れた人形が右手に鎌を出現させ、それを影に向かって思い切り振るう。振るわれた鎌は、影をいとも簡単に寸断する。寸断された影は、奇声とも取れる絶叫を上げ、斬られたところから黒くほころばせる。

「これでぇぇぇぇぇっっ！」

ハセオが右手を影に向けて突き出す。すると、八枚の光の花弁のようなものが展開、砲身のようなものが現れ、手のひらに光弾が収束する。

「終わりだぁぁぁぁぁぁぁっっ！」

放たれる光弾。直撃を受けた影は、断末魔の叫びすら残せず、跡形もなく消し飛んでいった。

ハラオウン家。

そのリビングに、つい最近と似たような光景が広がっていた。もっ

とも、前回のメンバーに加えて二人加わっているが。

「私はバゼット＝フラガ＝マクレミッツ。そこにいるネオの姉で、時計塔の魔術協会に所属する魔術師だ」

「まぁ、バゼットは魔術師っつーか、ボクサーって言った方が良いがほぅっ！！」

「ふざけたこと言わないでください、ランサー」

バゼットが自己紹介する。それを横からランサーがジョークをぶっ放すが、それを高速で放たれたバゼットの鉄拳が制す。彼女なりのツッコミなのだろうが、オーバーキルと思われることに、誰もツッコミはしない。もちろん、彼女の弟であるネオですらだ。

「じゃぁ、次は俺が。こいつはランサー。クラスは『槍兵』で、姉さんのサーヴァント」

「ぁ、あぁ、よろしく、な」

腹を押さえながら起き上がり、何とか挨拶するランサー。バゼットは、そんな彼に見向きもせず、横に置いてあった鞄――――鞄というより、長い筒のような物――――から何か取り出し、テーブルの上に置く。

それは、細長い何か。麻袋に収納されたそれからは、その場にいる

全員に、とある感情を抱かせるものだった。

「これは？」

「これは、知人に頼まれた物だ。ネオ、おまえ宛だ」

「俺宛？」

バゼットから伝えられた、ネオ宛である細長い何か。それから放たれるものは、まさに『殺気』と言うべき禍々（まがまが）しいもの。今まで幾度となく感じてきた感覚だが、今までで一番強い殺気だった。覚悟を決めたように息を呑むと、ネオは麻袋をゆっくりと縦に裂いて、中に入っていたものを取り出す。

「な、これは……」

「……刀？」

はやてが拍子抜けしたかのような声をあげる。そう、袋に入っていたのは、一本の刀。刀身は鏡のように輝いておりながら、その色は漆黒。その、闇のような色ながらも一つの芸術品として成り立っている。しかし、それを見た彼の顔は、驚愕の表情が浮かび上がっていた。さも、その刀の銘を知ってるかのように。

「ネオ、どうかしたの……？」

「黒狼丸（こくろうまる）、か……」

彼が呟いたのは、一つの銘。それは、彼が昔使っていた愛刀の銘であり、自分で初めて打った刀だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その頃、別の次元世界。岩ばかりの峡谷の、少しだけ開けた場所。端から見れば、決闘場に相応しいことこの上ないそこで……

―　パチンッ　爆ッ！　轟ッ！　―

その場所に似つかない、乾いた心地良い音とともに、赤い閃光が走り、岩場の一部が爆ぜた。それは『爆発』というより、もはや『炎上』からの『融解』に近いかもしれない発火現象である。

「チィッ、流石に調整必須の『これ』で戦うのは、かなり無理があるってーの！」

そう言いながら、黒衣を身に纏い、近場の岩に着地してから右手の中指と親指を付けた状態で、その腕を目標に向ける炎髪灼眼の少年――飛鳥紅音。彼は魔力を練り上げることだけに集中すると、目標の場所を目測だけで標準を定め、中指をスライドさせる。

―　パチンッ！　轟ッ！　―

再び爆発。目測といえど、その狙いは正確無比。目標を確実に討つため、先に移動手段を潰そうをしたのが見切られたのか、目標は勢いよくサイドステップからの突進で、爆発を回避し、爆風で突撃速度をあげる。

「ほら、潰れなよっ！！」

彼の目標――淡い緑の長髪に栗色の瞳、濃青の学生服にブーツの少女が、その可愛らしい外見に似合わない、恐ろしい言葉と大量の鉤付き金棒を大きく振りかぶり、紅音を潰しにかかる。

「くっ、ローレライ！　障壁展開、最大出力で！！」

［任された！］

瞬間、紅音が右手を開いて突き出す。すると、首に下げた赤い宝石付きのペンダントが淡く輝き、赤い障壁が展開され……

―　戟ッ！　―

「くっ……」

「あははっ」

ぶつかる障壁と金棒。しかし、そこは技術と場数の差なのか、徐々にではあるが紅音が展開した障壁にヒビが入りはじめる。

それを見て、紅音は苦悶の表情を見せる。しかし、それがアダとなったか、少女の表情に狂喜と殺気が同時に浮かび上がる。

「潰れちゃえッ！」

再び大きく振り上げ、下ろされる金棒。既に回避は間に合わない。だが、そこで諦めてしまうほど、紅音は潔くない。

口元に僅かな笑みを浮かべると、彼は下げていた左手を障壁の近くまで動かす。そして……

―　パチンッ、轟ッ！　―

「キャワッ！」

少女の目の前で、小規模の爆発を起こす。それを予測していなかったのか、少女は驚いて飛び退き、距離を離して再び金棒を構える。

「俺が右手でしか『それ』を出来ないと思ったか？」

嫌みたっぷりにそう言うと、紅音は足に力をため、地面を蹴って一気に少女との距離をほぼゼロにする。

そして、最後の詰めとばかりに地面を蹴って滑空。右脚を振り出す。空中中段回し蹴り。彼の得意技であり、お決まりのフィニッシュブローだ。

「それ、自爆行為じゃない！？　まぁ、向かって来るなら潰すだけだけどっ！」

「さぁて、それはどうだ……かっ！？」

―　撃ッ！　―

ぶつかり合う脚甲と金棒。互いに火花を散らしながらぶつかり合い、最後には魔力の波動で双方に再び間合いが開く。

（よし、この距離ならっ）

サッと右手を振るう。すると、紅音の正面に大量の茜色の魔力弾が配置される。その数はゆうに五十を越えている。

そして、一気にそれらを発射しようと右手を振り下ろしかけた瞬間

――――

―　響ッッッッ！！　―

「あっ、がぁぁぁぁぁぁっっ！！」

突然、紅音は頭を抱えて苦しみだす。魔力の流れを乱されて制御しきれなかったのか、配置されていた多量の魔力弾は跡形もなく消えていく。

周りに響いているのは異様なまでの共鳴音。そこがまるでライブ会場か何かのように、周りの岩に反響し、彼にむけて集中していた。

「全く、追い込まれすぎよレライア。頭を使って叩くのが、貴女のやり方だと思ったのだけど？」

彼女の隣に下りてきたのは、ふわりとカールのかかった銀髪に翡翠色の瞳、白いブラウスに紺のベスト、灰青色のスカートに、真っ白のギターを肩にかけている女性。横目で『レライア』と呼んだ少女を見ながら、優しく静かに咎める。

「ご、ごめんミラ。こっちが仕掛けた罠（トラップ）、全部燃やしてっちゃうんだもん」

俯きながらそう言うレライア。しかし、彼女が『ミラ』と呼んだ隣に下りてきた女性は、そんなレライアを優しく撫でながら、再び肩にかけていたギターに手を伸ばし――――

―　響ッッッ！！　―

短く音を鳴らす。すると、再び眼下にいる紅音は頭を抱えて苦しみだす。

「じゃ、帰るわよレライア。貴也君とロナベルのほうで、あれは回収したみたいだし」

「うん――――じゃあね、どこの所属か分からない魔導師さん？」

そう言いながら二人の女性は、岩場に倒れる少年を見下し、その場から消え去った。

それから少し経って――――

「――――くっ、やられたな」

［そのようだな］

紅音は、今だ痛む頭を押さえながら起き上がる。

「あれが、ミラ＝パーシファル。音を操る魔導師か」

［そして、先程交戦したのが、書類にあったレライア＝ヴァルス。なかなかの強敵だったな］

二人でそう分析すると、紅音は通信用モニターを出し、いつものように連絡先をタッチする。

『あっ、紅音お疲れ。で、どうやっ……って、どないしたん！？　ボロボロやない！？』

通信に出たのは黒のポニーテールの少女。彼女はいつも通り話しかけたが、紅音のボロボロっぷりを見て慌てだす。しかし、そんな彼女を見ても、紅音は冷静に右手をヒラヒラする。

「あぁ、ローレライのモード？を調整してたら、ちょっとあってな。とりあえず、今から戻るから、ジンを待機させてくれっか？　正直、結構キツイ」

『うん、わかった。気ぃ付けてな？』

そういうと、通信がぱったり切れる。きっと向こうでは、むやみに彼女が騒いで大事になってることだろう。目に見える。

「さて、戻るか………っ痛」

彼が足元に転移の術式を展開すると、一瞬にして消え去った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

夜。

ベランダに出ていたネオは、柵に寄り掛かりながら夜風を浴びていた。

「黒狼丸。またお前は、俺に殺人鬼になれと言うのか…………？」

静かに呟くネオ。彼の背後で、黒狼丸の黒い刀身が呼応するように月明かりを反射する。

―　ピンポーン　―

不意にインターホンが鳴った。それに気がついたネオは、チラッと壁にかけられた時計を見る。時間は十時。こんな夜遅くに家を尋ねて来る人は、まぁ、よく考えれば一人しかいないわけで。

「どうも」

ドアを開けた先には、金髪の女性、隣の部屋の住人であるフェイトが立っていた。

「……入るか？　俺に用があるんだろ？　茶ぁくらい煎れるよ」

「うん、ありがとう」

ネオは頭をガシガシと掻きながら、彼女を部屋に促す。彼女も、既にそれが当たり前になっているかのように、普通に入っていく。

フェイトは３ＬＤＫのリビングにある木で出来たテーブルの前に行儀よく座っている。それを横目で見て、ため息を静かにひとつ吐くと、事前に準備しておいたティーポットから紅茶をカップに注ぐ。

「ほい。とりあえず、アップルティーで良いか？」

「うん、ありがとう」

そう言いながら、フェイトはテーブルにおかれたカップを手にとって、口を付ける。すると、すぐさまその表情が明るくなった。

「……美味しい」

「そりゃ、手順をしっかり踏んで入れたからな。一端の喫茶店で働けるくらいの自信はあるぜ？」

そう言いながら自分のものを飲むネオ。その表情に、僅かながら微笑みが入っていたことを、彼女は見逃さない。

「何か、嬉しいことでもあったの？」

「ん、あぁ、いや、なんでもない。ちょっと、な」

そういうネオは、壁にかけられた何枚もの大きな写真に視線を移す。促されるようにして、フェイトもその写真を見る。

そこには、多くの人が写っていた。どの写真の中心にいる、左目を

前髪で隠しているのがネオ。その周りに、とある一枚には黒髪の普通過ぎる少年や、金髪赤眼の快活そうな女性等が、本当に自由にポーズを決めて写っている写真。またある一枚には、ネオを含めて五人しか写っていないものもある。

「士郎さん達、元気かな？」

そう呟く彼の視線に、一際目立つ大きな写真が飾ってある。その写真は、どの写真にも勝（まさ）って多くの人が写っており、黒い体躯の明らかに人外の存在っぽい人も写っていた。

「俺は、この人達に言ってきたことがある」

「……」

ネオが独り言のように呟く。しかし、それに敢えてフェイトは言葉を挟まなかった。そうしてでも、彼のこれからの言葉を聞いておきたかったのだ。

「いくら俺がこの目を――――直死の魔眼を持っていても、無益は殺しはしない。その代わり――――」

――――人を助けるために使う、ってな――――

「ごめんね、こんな遅くまで」

玄関先で、フェイトは帰り支度を整えて立っていた。まぁ、家は隣なので、そう荷物はないわけだが。

「何、気にするな。それより――――」

「ん、何？」

頼みといわれて、鋭く反応したフェイト。それから、少し考えるような仕種をしてから、ネオはこう言った。

「俺を、その、ミッドチルダ、だったか？　そこに連れていってほしいんだ」

第一章　～邂逅編～　了

九話：終わり、そして再び……（後書き）

いかがでしたか？

感想、質問、意見、ネオ、士郎、アーチャーの三人が投影するオリジナル宝具の募集、コラボ作品の依頼など、どしどし待っています！一言でもいただけると、嬉しいです。

さて、次回からはやっとこさ本編、ＳｔｒｉｋｅｒＳ編に入ります。

一応、今回の九話までが『第一章～邂逅編～』ということで、次回から、『第二章～始まりの翼編～』となります。

内容は、原作本編の一話から九話、つまり、最初からアグスタの一件が解決するまでです。オリジナルキャラ達、特にネオとハセオの二人を、どうやってあのアグスタ事件の一件に絡ませるか、ただ今考案中です。なるべくあっと驚くような展開にしたいと考えておりますので、首を長くしてお待ち下さいね。

あと、同時公開ということで、ネオが本気の主人公を演じるサイドストーリー『天の系譜』をボチボチ書いて行こうと思います。一応、本編とリンクしているところも沢山入れる予定なので、そういうところを見てくれると嬉しいです。

では、次回の本編でまた会いましょう！

S
e
e

y
o
u

n
e
x
t

t
i
m
e
!

第二章　～始まりの翼編～　予告（前書き）

※注意※
これは、第二章の予告編です。

第二章　～始まりの翼編～　予告

集ったのは、四人のストライカーとなる原石。

「行っくぞぉぉーーーっっ！」

「ランスターの弾丸に、撃ち抜けないモノは無いのよっ！！」

「大切な人を、守りたい！」

「一閃必中！！」

そして、完成を見た魔眼を持つ男の武器。

［はじめまして、マスター］

「おまえの名は、シキ」

彼に集う四人の魔導師。

「久しぶりですね、義父様（おとうさま）」

「何だ、ここは。女の魔窟かよ」

「良いですね、こういう空間も」

「さぁ、行きますわよ！」

それぞれを思いを胸に抱き、今ここに、新たな物語が始まる。

魔法少女リリカルなのは～剣持つもの～

第二章　～始まりの翼編～

「何度挫折しても、何度でも這い上がってくれば良い。それが、努力するってことだ」

そして始まる、もう一つの闘争の物語。

「その眼、俺の眼と、似てる？」

「お前の眼、それが直死の魔眼か」

夜、彼女達の知らないところで起こる、彼だけが知ってる物語。

「とある国には三度目の正直とか、仏の顔も三度までとか言う諺があったな――――」

「赤枝！　足を引っ張るなよ！？」

雲がかかり、月明かりすら届かない雨の夜。

「今のお前なら、殺してやる」

「凶（まが）れぇぇぇぇぇっっ！！」

その日、彼は一時の殺人鬼と化す。

「もしもいるなら、俺は、神様だって殺してやるさ」

「お前は……何なんだ……？」

同時公開　～猟奇歪曲・不然心理～

「あと俺は、何人殺せばいい……？」

第二章　～始まりの翼編～　予告（後書き）

次回より本編突入！

お楽しみに！

幕間～ネオ＝F＝マクレミッツの日記～（前書き）

本編に入る前の幕間です。

どうぞ。

幕間～ネオ＝F＝マクレミッツの日記～

新暦７５年　三月某日

あれから四年の歳月が流れた。

俺は、ミッドチルダに行くまでの三年間を、この海鳴の地でのカード回収をメインに活動した。

その三年間のうち、運が良かったのか、最初の一年、俺が初めて海鳴に来た年で、存在が確認されていた三枚のカードを全て回収できた。これは、本当に運が良かったのと、俺が頼もしい仲間、友人に出会えたことが大きいと思う。

最初に回収できた一枚は、セイバーのカード。これは、海鳴に来た初日に手に入れたカードだ。

この日は、俺が高町なのは、八神はやて、ハセオ＝ミサキ、そして、フェイト＝Ｔ＝ハラオウンと出会った日でもある。

彼女達と戦って、正直驚いた。これでまだ年齢は中学生なのかと。まるで才能の塊ではないかと。正に彼女達の実力は、タイマンでサーヴァントとやり合える俺の力と同等、もしくはそれ以上だったのだから。

その後、色々あって協力関係になり、俺が彼女達の通う学校に転属

になってから、その関係は『友人』へとランクアップした。色々あってと言うのは、長くなるので割愛させていただく。

その後、時が過ぎて八月。夏休み真っ只中に、二枚目のクラスカードを回収した。クラスはライダー。その前にも、謎の黒い塊がライダーの形をとって襲い掛かってきていたが、その時は届け物を届けに来た、俺の姉であるバゼットと、そのサーヴァントであるランサーに助けられている。その時の教訓を基に、ライダーはほぼ秒殺したのは、いい思い出だ。その後、海でハセオと俺が逆ナンパしに来たのをサラリとスルーし、逆にフェイト達をナンパしてきた不埒な奴らをボコボコにしたり、はやての家族であり守護騎士のシグナムと模擬戦をして死にかけたりと、そんなあまりにも忙しい夏休みが明け、文化祭が終わって一段落していた日に、三枚目のカードを回収した。

クラスはアサシン。無駄に沢山分身するので、はやての広域魔法で一蹴してもらい、今回もほぼ秒殺だった。

そして俺は、音峰のジジィに許可をもらい、一時的に魔術教会を抜ける手配をしてもらった。あまりにもイレギュラーな為、許可をとるのにかなりの時間がかかったが、何とか取ってもらった。この時だけ、俺は音峰に感謝したよ。

で、何故抜ける手配をしてもらったかと言うと、時空管理局というところに十年契約で雇ってもらい、局員として働きながらミッドチルダに存在するカードを回収する為だ。局員になれば色々な場所に赴いて調査に行ける、と言うのがフェイトの言ってることだ。

で、雇ってもらうために試験を受けたのが、つい一年前のことだ。それまで、俺は周りの奴らが高校受験の勉強をしている間、必死に

なって試験対策の勉強を三人、主に一番出来るフェイトに教えてもらっていた。

試験は何種類かあり、普通の学力などに加え、魔法に関する知識などを見る筆記試験、詠唱が日必要な儀式魔法の能力を見る試験、そして模擬戦、この三つを、それぞれフェイト、はやて、なのはに教えてもらっていたのだ。

良い先生に恵まれ、試験は一発合格で、二等陸士の資格をもらった。ちなみに、今は一等陸尉。いろんな場所を調べて、悪漢をとっちめている内に、いつの間にかここまでになっていた。

そんなこんながあり、今俺は、時空管理局一等陸尉、機動六課所属のネオ＝F＝マクレミッツとして、局員として働きながら魔術教会の封印指定執行者（休職中）としてのカード回収を続けている。

幕間～ネオ＝F＝マクレミッツの日記～（後書き）

次回から、やっと本編に入れそうですので、もう少しお待ち下さいね。

感想、意見、質問、コラボの依頼、投影宝具の案など、どしどしお待ちしています！

では、次回もお楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9422p/

魔法少女リリカルなのは～剣持つ者～

2011年10月10日13時55分発行